

令和5年度指定文部科学省事業

新時代に対応した高等学校改革推進事業

(普通科改革事業)

事業成果物

第2年次

熊本市立必由館高等学校

## 目次

### I 研究概要

- 1 研究開発の概要
- 2 研究開発概要図
- 3 スクール・ミッション
- 4 スクール・ポリシー

### II 事業の概要

- 1 事業の実施日程
- 2 事業の実績の説明
  - ① カリキュラムの検討内容
  - ② 管理機関による事業の実施体制や管理方法
  - ③ 高等学校における事業の実施体制や管理方法について
  - ④ 運営指導委員会の体制および取組
  - ⑤ コンソーシアムの体制および取組
  - ⑥ コーディネーターの配置および活動内容
  - ⑦ 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況
  - ⑧ 管理機関における事業全体の成果検証、評価
  - ⑨ 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）
  - ⑩ 成果普及のための取組
  - ⑪ 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり
  - ⑫ 他の事業との関係

### III 事業の詳細

- 1 運営指導委員会・コンソーシア会議
- 2 学校設定教科「必由学」の設置に向けた取組
- 3 外部有識者による講演会・研修

### IV 評価分析

- 1 成果目標の達成状況
- 2 Ai Grow（評価分析ツール）の概要
- 3 評価分析を踏まえた次年度の取り組み

### V 事業一覧

### VI 新学科カリキュラムマネジメントロジック案

### VII 成果概要図等

# I 研究概要

## 1 研究開発の概要

令和5年度指定文部科学省事業新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革事業）の委託を受け、令和6年度新学科の開設に向け、熊本市立必由館高等学校普通科改革に取り組む。

### （1）学校名・設置（予定）年度・設置する学科の種類

学校名	熊本市立必由館高等学校
所在地	熊本県熊本市中央区坪井
学科の種類	地域社会学科
設置年度	令和6年度

### （2）現在の設置学科・コース 募集定員

学科	コース	クラス数	募集定員
普通科	普通	6クラス	40名×6クラス=240名
	国際コース	1クラス	40名×1クラス=40名
	芸術コース	1クラス	40名×1クラス=40名
	服飾デザインコース	1クラス	40名×1クラス=40名
	計	9クラス	360名

### （3）新しくの設置する学科・コース 募集定員（学科コース名は仮称）

学科の名称	コース	クラス数	募集定員
文理総合探究科	文理コース	7クラス	35名×7クラス=245名
	芸術コース	1クラス	30名×1クラス=30名
	生活デザインコース	1クラス	30名×1クラス=30名
	計	9クラス	305名

【熊本市立必由館高等学校】地域社会にかかる新学科を設置（令和6年度予定）

教育理念： 自ら考え、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら、自らの人生とよりよい社会を創造する力を育てる学校を目指す

革新的な教育活動の実践

《育成する資質・能力》

- I 多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
- II 社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力
- III 分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
- IV 自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力

《特色・魅力ある先進的な教育の取組》

- ① 少人数によるクラス編成、生徒が主体的・協働的に学ぶ仕組み  
多様な生徒へのきめ細かな指導、支援を実現  
1 クラス30人または35人の少人数によるクラスを編成  
生徒が主体的・協働的に学ぶことのできる授業づくり
- ② 「学校設定科目 必由学」の新設  
持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育み、  
「Well-being」としての社会情緒的能力などを醸成
- ③ 熊本市役所等、地域社会の資源を活用した  
課題解決型学習の充実  
市役所の全面的な協力体制のもと、市立ならではの  
教科等横断的・探究的学習を行う。
- ④ 探究活動等で収集したデータを科学的に  
分析・検証し活用する力の育成  
ICTを活用することにより、課題解決に向けデータを科学的に分析・検証し、表現する力の育成を目指す。
- ⑤ 生徒・教師が主体的に学校づくりに参画する Agency School  
生徒が授業づくりや校則の策定・見直しなど、生徒が学校創生に参画  
教育実践及び教育的効果を積極的に国内外に還元するとともに、  
自らの学びは自らが創る Agency Schoolを目指す。

様々な教育活動を支援



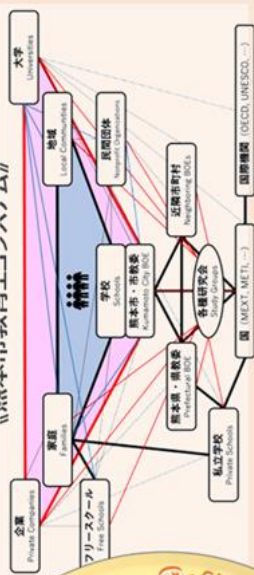
連携協力体制

《コンソーシアム》

ESD×キャリア教育 STEAM×ICT

熊本市教育エコシステムから、より中核的に本校の教育活動を支援する。

《熊本市教育エコシステム》



広報活動



熊本市教育委員会主催の教育イベントである「Kumamoto Education Week」において、本校生徒による先進的な取組に

関するプレゼンテーションやコネクター等によるパネルディスカッションを行い全国に向けて本市の先進的な取組を積極的に発信する。



※令和3年度の「Kumamoto Education Week」の内容はこちら⇒

### 3 スクール・ミッション

熊本市立必由館高等学校は、文理総合探究科を有する高校として、熊本市の未来を拓き、健康で心豊かな人生と幸せな社会を生み出す、次のような資質・能力を有したリーダーを育成します。

- ・多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
- ・地域社会や国際社会に関する理解を深め、課題や魅力を見出す力
- ・分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
- ・自己の興味・関心に気づき、深め、生涯にわたって学び続ける力

この目的のため、「市立ならでは」の次のような取組を行います。

- ・多様な生徒一人ひとりが主体的かつ協働的に学校づくりに参画する機会の拡充
- ・市役所、市立専門学校、大学、企業等と連携・協働した課題探究型学習の推進
- ・文理の枠を超えた教科等横断的学習・探究的学習の推進
- ・持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育むキャリア教育の推進

### 4 スクール・ポリシー

○グラデュエーションポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）

- ①校訓である「至誠・進取・和敬」のもと、多様な価値観を認め合い、互いの価値を尊重し、新たな社会の創造、発展を担う人材を育成する。
- ②確かな学力と柔軟な思考力を備え、well-being な社会を創造、発展させるために必要なリーダーシップを有し、主体的に協働できる力をもつ人材を育成する。
- ③自己の興味関心に気づき、幅広い知識とものの見方・考え方を身に付け、自分の適性や能力を生かした進路選択へ繋げるとともに、地域や社会に貢献できる人材を育成する。文理コース
- ④芸術に関する主体的な学びを通して専門的な知識・技能を身に付け、豊かな感性や柔軟な発想力、創造力を伸ばすとともに、地域や社会の共創に貢献できる人材を育成する。芸術コース
- ⑤生活に関する総合的な知識、感性、実践力を身に付け、現代社会の様々な課題解決に向け、well-being の視点から、新しいライフスタイルのあり方をデザインすることにより、地域や社会の共創に貢献できる人材を育成する。生活デザインコース

○カリキュラムポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）

- ①多様な価値を尊重し合い、リーダーシップを有する人材を育成するために、生徒が主体的かつ協働的に参画できる授業や学校行事、部活動、生徒会活動などの新しい時代に求められる特色・魅力ある教育に取り組む。
- ②地域、行政、企業、大学などと連携・協働し、グローバルな視点で教科等横断的な学びを通して課題を分析し、論理立てて表現する課題探究型学習に取り組む。
- ③自己の興味関心に応じた幅広い進路選択に対応したカリキュラムのもと社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。文理コース

④芸術文化を取り巻く社会に目を向け、探究的な学びの中で専門的な知識・技能を習得し、豊かな感性を伸ばしながら社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。芸術コース

⑤「衣」をはじめ、「食」、「住」などの生活課題について課題探究型学習を取り入れながら、地域と連携した実習や研修、社会共創に関わるグローバルな学習に取り組む。生活デザインコース

○アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）

①中学校までの基礎学力を有し、自ら探究心をもって何事にも積極的に取り組むことができる生徒

②地域社会に関心を持ち、本校の学びを生かしながら生涯にわたって主体的に社会を創造していこうとする生徒

③教科等の授業や学校行事、部活動、生徒会活動等に自らの思いや考えをもって協働的かつ意欲的に取り組もうとする生徒

## Ⅱ 事業の概要



1 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和5年4月1日～令和6年3月31日）												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
<b>カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施</b>													
カリキュラム開発会議	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外部講師による講義		○	○	○		○	○	○	○	○	○		
<b>関係機関との連携協力体制の構築・維持</b>													
運営指導委員会			○										○
コンソーシアム会議								○					
進校視察						○		○				○	
市役所連携・フィールドワーク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<b>コーディネーター</b>													
コーディネーター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<b>新学科設置に向けた説明会等の実施</b>													
説明会（中学生・保護者）					○	○	○						
オープンスクール				○	○								
雑誌・TV・ラジオ		○						○	○				
<b>成果発表・成果普及</b>													
探究学習発表会						○							○
StudentAgency 熊本県内研修					○								
第4回 SB StudentAmbassador九州大会へ参加								○					
第8回サステナブル・ブランド国際会議 2024 東京にて九州代表としてプレゼン発表												○	
<b>成果検証</b>													
委託業者評価システム		○								○			○

(2) 事業の実績の説明

令和5年度文部科学省事業新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革事業）の委託を受け以下の通り熊本市立必由館高等学校普通科改革に取り組んでいる。

① カリキュラムの検討内容

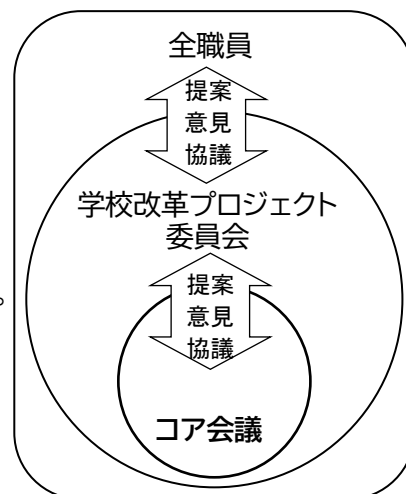
(ア) 学校改革プロジェクトチーム

▶コア会議（週1～2回）

- ・新学科のカリキュラムの研究・協議・検討を行う。
- ・学校長・教頭・探究部長・探究副部長・教務主任

▶学校改革プロジェクト委員会（月1～2回）

- ・新学科の学校設定教科・科目の研究・協議検討を行う。
- ・コア会議メンバー・各コース主任・教科代表者  
学校探究部



(イ) 取組概要

4月 学校設定科目の内容について検討開始

5月 スクール・ミッションの策定

6月 スクール・ポリシーの策定

教育課程編成完了

7、8月（夏季休業中）

学校設定科目の内容について集中協議

キャッチフレーズ決定

「出あう つながる とともに創る

～必由館でやりたいをカタチに～」

オープンキャンパス開催

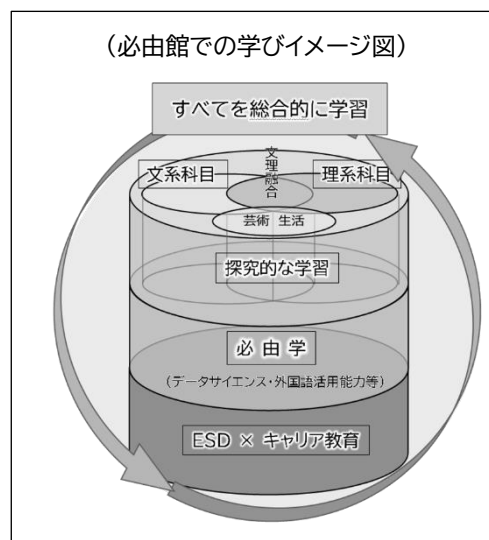
8月 校内組織改編検討開始

「新しい学校創りと働き方改革」

9、10、11月（広報活動）

中学校へ出向いての高校説明会

地元テレビ・ラジオで告知



② 管理機関による事業の実施体制や管理方法

(ア) 事業内容について、学校と随時連絡を取りながら、指導・助言を行った。

(イ) 運営指導委員会、コンソーシアム会議を主催し、事業の運営、改善を行った。

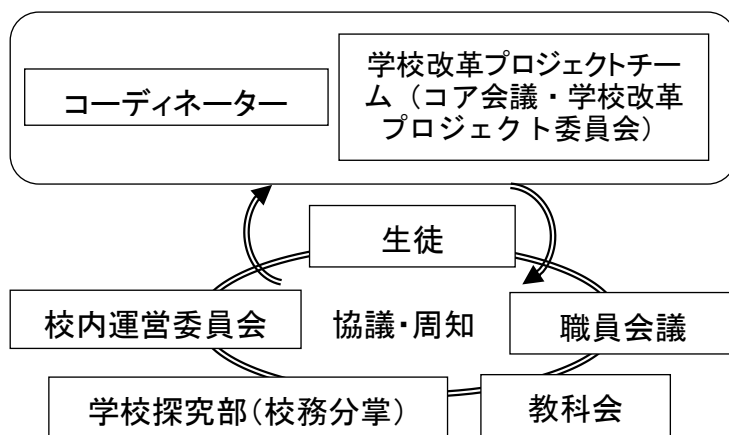
③ 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

(ア) 学校改革プロジェクトチーム（コア会議・学校改革プロジェクト委員会）の設置

(2) ① (ア) 参照

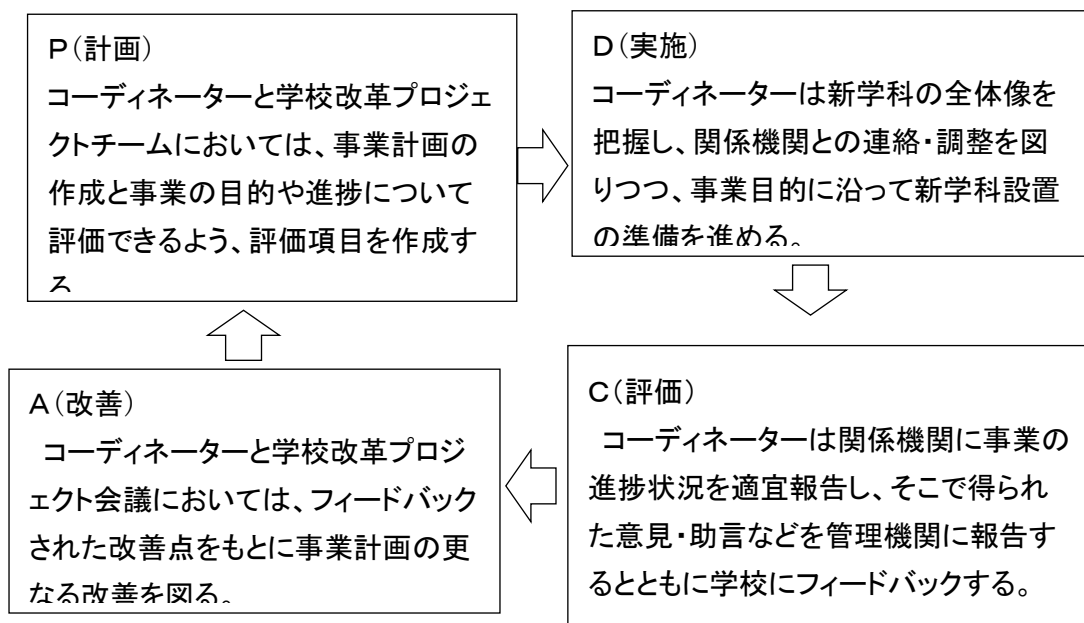
(イ) 実施体制

コーディネーターと学校改革プロジェクトチームにおいて関係機関の協力の下、事業計画案を作成し、その後、校内運営委員会、職員会議、学校探究部等で校内での協議及び周知を行い、原案を作成する。



(ウ) 事業推進体制管理

事業推進に当たっては、校長がリーダーシップを発揮し、学校改革プロジェクトチームを開催する。事業計画の作成にあたっては、各関係機関との連携・協力も得ながら、事業の目的に沿った実効性のあるものとなるようPDCAサイクルに基づいて改善を図る。



④ 運営指導委員会の体制および取組

(ア) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
熊本大学 特任教授	前田 康裕	教育学・ICT教育 著書「マンガで知る 未来の学び」等多数。
熊本大学教育学部教授	宮瀬 美津子	生活科学一般
Y's READING 代表取締役	中山 善晴	プレゼンテーション教推進

放射線専門診断医 医学博士 熊本大学医学部 臨床教授		経済産業省「地域未来牽引企業」選出 高等学校キャリア教育等に貢献
九州地方ESD活動センター	澤 克彦	全国的なESD普及活動
熊本市立中学校長会代表	田口 恵子	熊本市立桜山中学校長 市立高等学校専門学校改革検討会議メンバー
必由館高等学校	若木 恵介	必由館高等学校 PTA 会長
熊本市教育センター	澤田 伸一	熊本市教育センター所長

(イ) 運営指導委員会の取組

事業に関わる各機関に、下記の項目について専門的知見から指導・助言を行った。

- ▶教科等横断的・探究的な学びを充実し、幅広い進路選択に対応する教育課程について
- ▶グラデュエーションポリシー(ICTを活用した情報活用能力等含む)の検証について
- ▶市立高校と市立専門学校、大学間の連携強化(探究的な学びの共同実施等)
- ▶市が所管する地域資源や人的ネットワークを活用した教育方法について
- ▶学校改革に資する人事交流・人材活用等について
- ▶運営・検証に生徒が主体的に関わるエージェンシー・スクール(OECD連携)について

⑤ コンソーシアムの体制および取組

(ア) コンソーシアムの体制

所属	氏名	主な実績
熊本県立大学 教授	飯村 伊智郎	ICT教育
九州地方ESD活動センター	澤 克彦	全国的なESD普及活動
熊本市政策企画課	迫本 昭	政策企画課長
熊本商工会議所 副会頭	毛利 浩一	産学官連携
熊本市現代美術館 副館長兼事務協局長	岩崎 千夏	地域創生 (芸術)
熊本市教育委員会 学校改革推進課課長	松永 直樹	管理機関の課長

熊本市教育委員会 学校改革推進課教育審議員	上野 正直	管理機関の教育審議員
--------------------------	-------	------------

(イ) コンソーシアムの取組

コンソーシアムは、学科改編に伴う事業計画や実施方針などについて学校改革プロジェクトチームと定期的に意見交換を行う。協議において出た意見などを踏まえて検証授業等を実施し、事業計画の見直しを行う。あわせて教職員・生徒と共に意見交換を行い、教育課程の実施に関わることでスクールエージェンシーとしての意識変革を図る。

⑥ コーディネーターの配置および活動内容

(ア) 熊本市教育委員会学校改革推進課教育審議員が熊本市立必由館高等学校のコーディネーター業務及び授業づくり等に指導・助言を行った。

(イ) 必由館高等学校においてはコーディネーターとして次の3点に取り組んだ。

▶学校でのコーディネーター業務

- ・本校が策定するカリキュラムづくりの支援、事業実施体制の構築、年間指導計画の策定支援、評価方法の設計等を行う。
- ・学校改革プロジェクトチームを協力して、運営全体のマネジメントを行い、事業計画策定のサポートと評価、カリキュラム作成を行った。

▶カリキュラム開発業務

- ・探究的な学習と育成したい資質・能力を融合させ、導入・知識・推測・理解・知識理解の統合・考えのまとめ・成果へとつなげるためのカリキュラムについて、学校との協議・調整を行った。

▶地域等におけるコーディネーター業務

- ・行政や企業など外部機関との調整協議、地域資源や課題の把握、分析、人材バンクの構築等を行う。初年度においては、企業、行政、大学等の教育機関等で構成するコンソーシアムが十分に機能するよう、各団体との連絡・調整等の業務を行った。

⑦ 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

(ア) パブリックコメントの実施（令和4年9月）

(イ) 熊本市WEB広報誌「with you」の活用（令和5年2月 12月）

(ウ) 学校HPの活用

- ▶WEB版学校紹介リーフレット作成
- ▶YouTubeチャンネル（随時更新）
- ▶必由館X（旧Twitter）（随時更新）

(エ) 雑誌やTV・ラジオ等

- ▶熊日進学ナビ掲載（地元進学誌）（令和5年5月）
- ▶おはよう熊本市（ラジオ）（令和5年11月）
- ▶こんばんは熊本市（テレビ）（令和5年11月）

(オ) 学校説明会の開催（夏休中）

(カ) 芸術コース体験入学

(キ) 中学校訪問・新学科紹介（令和5年8月～10月）

⑧ 管理機関における事業全体の成果検証、評価

- ・ AiGrow を活用した生徒の気質とコンピテンシーを可視化する調査の実施
- ・ 年度当初と年度末に少なくとも2回は調査を実施し、2点観測によるデータの比較から生徒個人及び学校全体としてのコンピテンシーの変容を分析し伸長につなげる。

(ア) 必由館高等学校が目指す資質・能力

学校コンピテンシー	分野	コンピテンシー
<b>①少人数によるクラス編制の実施による効果</b> <b>→多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力</b>		
(1) 自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力	他者	寛容
(2) 何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(3) 他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力	他者	影響力の行使
<b>②「学校設定科目必由学」の新設</b> <b>熊本市役所（各課・室）、国内外 NPO 及び民間事業者等、地域社会の資源を活用した課題探究型学習の充実 →社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力</b>		
(1) 状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力	認知	課題設定
(2) 興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力	自己	興味
(3) 自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力	コミュニティ	地球市民
<b>③探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成</b> <b>→分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力</b>		
(1) 道理や筋道に即して物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力	認知	論理的思考
(2) 自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力	他者	表現力
<b>④教育効果を外部に還元するシステムによるエージェンシー・スクール</b> <b>→自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力</b>		

(1) 何らかの課題に直面しても、「自分ならできる」と自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(2) 自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力	自己	個人実行力
(3) 自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力	自己	決断力
(4) どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力	自己	成長

⑨ 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

(ア) 「総合的探究学習の時間」

ITとして実際に授業を行い、あわせて指導・助言を行った。

(イ) 少人数によるクラス編制・生徒が主体的・協働的に学ぶ授業の実現

教職員数は現状を維持しながら、少人数学級（文理コース 35 人 7 学級、芸術コース 30 人 1 学級、生活デザインコース 30 人 1 学級）を実現（市立高等学校・専門学校改革基本計画で策定）することで、多様な生徒へのきめ細かな指導・支援を実現する。少子高齢化時代における新たな学校の在り方として、生徒が主体的・協働的に課題解決に向けて議論や検証、考察ができるような授業づくりを実現するとともに、指導法の工夫・改善の研修を充実させ、教職員の指導力向上を図る。

⑩ 成果普及のための取組

(ア) 熊本市教育委員会主催の教育イベントにおいて全国へ発信

熊本市教育委員会主催の教育イベントである「Kumamoto Education Week」において、本校生徒による先進的な取組に関するプレゼンテーションやコーディネーター等によるパネルディスカッションを行い全国に向けて本市の先進的な取組を積極的に発信した。

(イ) 研究成果発表の場を広げる取組

▶生徒が主体的に学びの成果を発表する取組として、国内外の高校生や学生と研究課題や研究成果に関する意見交換会や成果発表会を行う。

▶校内成果発表会に県内小中高校生・教職員や関係機関の職員等を招き、成果の普及・共有や提言・実践の場として活用する。

(ウ) 報道機関との連携、ホームページの活用、中学生への説明会、オープンスクール

(エ) 高校文化祭（探究学習成果発表会）へ中学 1・2 年生の生徒会を招待（11 月）

(オ) 芸術コース

▶音楽系においては各学期に校外のホールを貸し切り成果発表会を実施。

▶美術系・書道系においては公立美術館のホールを貸し切り卒業制作展を開催。

(カ) 生活デザインコース（現：服飾デザインコース）

・イベント会場を貸し切り成果発表会（ファッションショー）を開催。

⑪ 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくり

変化の激しい社会にあって、市民のニーズや高校卒業後の進路状況等を踏まえ、改編の効果を検証し、募集定員や学科・コースの在り方について状況に応じて柔軟に見直ししていく仕組みを構築する。また、学校内部で改革を推進する仕組みづくりと教育委員会の支援体制も併せて検討する。

(ア) コンソーシアムや運営指導委員会の体制は、原則として維持

事業終了後も取組内容の定期的な意見交換を行い、適宜必要な協力を得られるような体制を確立する。

(イ) 教育課程の見直し

総合的な探究の時間、学校設定教科・科目についてはPDCAサイクルに基づき適宜見直しを行う。

(ウ) 進学就職先への訪問、卒業生への追跡アンケート

高校での学びが卒業後の進路先での活躍にどうつながっているのか調査し、在校生へ紹介するとともに、得られたデータを検証し、校内での取組の改善につなげる。

(エ) 卒業生チューター制度

県内に在住する本校の卒業生にチューターとして、探究的な学習等のアシスタントを依頼する。卒業生の「先輩力」を在校生の教育に役立てる取組とする。

⑫ 他の事業との関係

市立2校（必由館高校及び千原台高校）は、各学校や熊本市の魅力化のための政策を継続的に考え、校長（学校）や教育長（教育委員会）への提案を行い、自らその提案を実行していく「生徒主体の学校運営プロジェクト」に取り組んでいる。

必由館高校は、市役所（市役所連携事業）や地域企業と連携しながら「総合的な探究の時間」に取り組んでおり、生徒は活動を通して熊本市のよさや課題などを自分事として捉え、よりよい解決について自分のキャリア形成に関連付けながら考えている。このような学習と、特別活動としての「生徒主体の学校運営プロジェクト」の両輪によって、生徒自身が協調性・主体性を育むとともに探究活動への意欲を高める。



### Ⅲ 事業の詳細

## 1 運営指導委員会・コンソーシア会議

### 趣旨

これからの10年を見据えた魅力ある学校（自らの学びは自ら作る Agency School）を目指し、必由館高等学校の現状、課題を踏まえ課題解決に向けた取組を協議する。

### 協議（指導・助言）の柱

- ・生徒の学びの姿勢の確立、職員の指導力向上
- ・探究的学習（学校設定教科「必由学」、総合的な探究の時間）の充実
- ・学科、コースの特色を活かした教育課程
- ・令和6年度学科改編に向け、改革を先取りした取組

### (1) 第1回運営指導委員会

ア 実施日時：令和5年6月30日（金）15:00～17:00

イ 出席者：前田 康裕、宮瀬 美津子、澤 克彦  
田口 恵子、上野 正直、城野 実

### ウ 次第

- 1 開会
- 2 熊本市立必由館高等学校 校長あいさつ 校長 城野 実
- 3 出席者紹介
- 4 日程説明
- 5 協議事項
  - (1) 必由館高等学校校改革に向けての取組状況（校長）
  - (2) 必由館高等学校普通科改革に向けての指導・助言（全体協議）
- 6 その他・諸連絡
- 7 閉会

### エ 委員の主な発言（⇒学校の回答）

・週30時間（現：32時間）とした場合、部活後にビジネス専門学校へ行って外国語や情報系科目を学ぶなど自分の得意を伸ばすことができるのではないかと。

⇒得意分野（科目）オンライン学習システムを導入した。活用法には課題がある。

・「自走」する生徒を育成するためには、普段からの授業を変えていかないと難しい。  
・授業については去年、おととして変わったなという印象はある。校内研修の数が増えているのではないかと。

・「これからの熊本を担っていくリーダーとなる人材」ウェルビーイング、暮らしを変えるコーディネーター的人材」を育成するためには授業改善が今後は必要。

⇒授業改善研修も含め年間15回の校内職員研修を実施。これまでは5回程度であった。先生たちが授業について話す機会が増えた。中学校との授業研究会もよいのではないかと。数多く、優れた授業を見る機会をつくる必要がある。

・必由館が変わるということで、中学教員も注目している。しかし、何を目指しているか、どう変わるかが、まだはっきりはわからない。

⇒カリキュラムとしては、総探・必由学が3時間増えただけに見えるが、総探・必由学を核とした学びの構造が変わる。

- ・総探をちゃんとやろうとすると、教科もきちんとしなきゃとなる。
- ・生活デザインコースだけカリキュラムを見てみた。これまで衣が中心だったのが、食住が入るのは分かった。授業一つ一つがどう変わるのか。
- ・市役所連携は面白いと思う。
- ・生徒がアウトプットするためには、先生たちが元気でないといけない。新しい仕事を増やすのは現実的に難しい。だとすると、日常の授業を変えていく必要がある。
- ・業務負担を減らしてくれる人を配置するのも手かなと思う。

⇒増員の要求は教員に限らず今後も継続して行う。

- ・準備がないとチャンスはつかめない。必由館には使えるところがあるまだまだ色々あるのではないかな。外側に資源を求めがちだが、学校自体が資源、使い勝手があると見せかえれば誘因力も出てくる。

⇒今後、外部への周知方法についても検討していく。

## (2) 第1回コンソーシアム会議

ア 実施日時：令和5年11月27日(月) 15:00~17:00

イ 出席者：飯村 伊智郎、澤 克彦、毛利 浩一、岩崎 千夏、遠藤 浩昭  
松山 泰斗(オブザーバー 共同通信社熊本支局)  
松永 直樹、上野 正直、城野 実

### ウ 次第

- 1 開会
- 2 熊本市立必由館高等学校 校長あいさつ 校長 城野 実
- 3 出席者紹介
- 4 日程説明
- 5 協議事項
  - (1) 必由館高等学校校改革に向けての取組状況(校長)
  - (2) 必由館高等学校普通科改革に向けての指導・助言(全体協議)
- 6 その他・諸連絡
- 7 閉会

### エ 委員の主な発言(⇒学校・管理機関の回答)

- ・「自分たちの学校だけじゃ見えないから、他の学校を見たい」という外を向いている感覚が素晴らしい。社会にどんな課題があって、どう解決すればいいのか、自校の中で考えていてもアイデアが出てこないとき、社会と接点を持つことも大事。その時ながら、「どこと組むか？」
- ・「好奇心」は大事。特に先生の「好奇心」が大事。ポジティブな背中を見せる。
- ・大人(教師)がわからないことを恥ずかしく思う必要はない。一緒に学べばよい。

・自走がさらに自走していくことにつながる。高校生を大人が信じ切ってしまうことが大事。

・高校生と社会をつなげる取組として、フードパルでは販売イベントを実施している。必由館には音楽コースがありコンサートも、フードパルでは実施可能である。資料館等も生物多様性を学ぶ上で刺激になると思う。

・答えがない学びは、人生を生きていく上で大事なこと。学校にいたる間は白か黒かだが、社会に出たとたん、自分で答えを探し、選び取らなければならない状況はかわいそうなことだと思う。社会にどれだけ触れるか。世知辛いことも含めて真剣に触れることが大事。

・熊本市役所との連携や熊本魅力推進生徒会は高校生目線でとてもよい。いま切実な問題に対する高校生の意見聞くことも大事なのではないか。

・子どもと高齢者が一緒に考えていくことは大事

⇒市役所職員も、高校生と接する中で感化されている職員が増えてきている。

・探究的学習については発表がゴールではなく、高校生がどう育っていくことが大事なのかをしっかりと考えることが大事。

・きれいごとだけでは済まないのが社会。その中でいかに生きていくかを考える強さを育てることが重要。

・物事新しいものを作るのも大事だが、廃れていくものを救い上げるような、高校生の力も必要。

・市立高校生というブランドを探し出し、それをうまく活用しながら、生徒たちの興味をうまく引き出し、社会に合致するものができれば、生徒は達成感を得て、大人もなるほどなとなるのでは。

・大人と高校生では、発信するところも、響くところも違う。そこを繋ぐことを必由学が担うと良いのでは。

・JICAは学生に事業提案を考えさせて、提案させて、よいものは実際に取り入れていく。若い人に考えてもらって行動することが大事だと思う。

・学校の先生がわくわくして取り組んでいる姿を見せるのは、とても大事。総探も、高校生と同じように、むしろ先んじて参加してもよいのではないか。

・「高校はどこですか？」と聞かれる。熊本独特の高校愛。これが何か生かせないか。

⇒探究学習では同じ興味関心の生徒・先生でゼミを行ってもいいのではないか。

新しい教科を作って一生懸命やっているが、教員数増の要求が通らないのは厳しい。総合的な探究の時間が単純に負担にならないか心配である。来年開校だけどゴールではない。成果も出てくると思うので、アピールしながら要求が必要。

・校長が必死でやる姿が、先生たちにも伝わると思う。

⇒ないものねだりより、あるものをいかに生かすかを考えたい。

・先生がいなければ高校生を使うしかない。未熟だから高校生に任せない、を乗り越えて未熟だけど高校生にまかせてみる。

・教職員のなり手も減っている中に働き方についても改革することで、先生方も今の仕事を楽しくできるだろうとなったらいいのではないかと思う。

(3) 第2回運営指導委員会、第2回コンソーシアム会議（合同開催）

ア 実施日時：令和6年3月11日（月）15：00～17：00

イ 出席者：宮瀬 美津子、中山 善晴、澤 克彦、田口 恵子、若木 恵介  
毛利 浩一、岩崎 千夏  
松永 直樹、上野 正直

ウ 次第

- |                                 |
|---------------------------------|
| 1 開会                            |
| 2 熊本市立必由館高等学校 校長あいさつ 校長 城野 実    |
| 3 今年度の取組について報告および意見交換           |
| 4 「総合的な学習の時間」活動成果発表会の参観および指導・助言 |
| 5 その他・諸連絡                       |
| 6 閉会                            |

エ 委員の主な発言（⇒学校・管理機関の回答）

・新しいパンフレットのカリキュラム票では、理文のプレゼンテーションが3年の選択で外されていますが、むしろ必要なことだと思いますので、他の教科等で学ぶことを示していった方が、印象としてよいのではないかと思います。

・中学校等からいろんな人材を交流するようなことはできないのですか？

「総合的な学習の時間」活動成果発表会について

⇒夏に中山先生にもご指導いただいたプレゼンイベントあたりから、生徒の姿も変わってきてあります。

・3年関わっていますが、子どもたちが以前よりしっかり話せるようになったし、行動が伴ってきているなと感じました。また、その場での感想でも、生徒からのプレゼンに対する指摘も質が上がっていると感じました。市役所職員でもできていない部分が多いので、感心しました。あとはどれぐらい生徒が熊本市に戻って活躍してくれるのか期待しています。

・PechaKuchaNight 通して生徒と関わりましたが、生徒がものすごく成長しているのを実感しました。すごいと思ったのは、アトラダムな質問に対して、きちんと答えることができていた。しっかりと聞いて参加しているのがすごいなと思いました。

・体育館を使う形が、コミュニケーション的には横に使う方がよいと思いました。寒いので、オンラインとハイブリッドに組み合わせる方法もあったと思います。



⇒職員も一堂に、という思いもあって今回の形をとったところです。また各教室でモニターを見ても、質が高まらないクラスが出そうな実情もあります。

・深い学びということを考えて、アウトプット型にしていくとき、代表に選ばれた子たちはよいとして、そうでない生徒たちはどうしているのか。みんなが発表する場をどう設けていくかということを考えていました。

⇒各クラスが全員で発表した上で代表を選んでいきます。

・学習会発表であれば今日のやり方でよかったが、実際にそこからどれだけ踏み込むことができるか、踏み込んだからこそ生まれる斬新なものは、今のままでは出ない。厳しい目で見れば、発表会止まりだったと思います。

⇒分析することと実行することが大事だと生徒会長が話していましたが、そのような学びができればよいと思います。

・学校と生徒が共創している感じにとっても好感をもちました。例えば、生徒会の代表の子が、先進校視察して得た学びを自分の言葉でみんなに語るのがとてもよかった。

先生も生徒も輝けば、他校からも視察が来る学校になると思う。そのようないい循環が生まれればと、期待を持ってみていました。

・発信していくことがすごく大事だと実感しました。

探究型の学校に変えていくということについて、中学校の生徒も保護者も関心が高いです。高度なプレゼンの技術的な感想が多かったのですが、内容に関してディスカッションができていくと面白いと思いました。

・普通科のままでいいのではと思っていましたが、子供の話や今日の発表を見て探究を軸にした学科も必要だと思うようになりました。しかし、保護者が全員、学校の改革の内容を本当にわかって進学してきているのか分かりませんので、引き続き発信が必要だと思います。

・大人になって、いろんな計画をして実行を目指すことはたくさんあるのですが、実現できなくて、次の計画をとということの方が多と思うのです。高校生が、うまくいなくても、どうにかしようと思えることが大事だと思いますし、そのようなことが高校生のうちにできることが大事だと思います。考える癖みたいなことは世の中に出たときに絶対に役に立つと思うので、みんなの前で発表できることが大事なのではなくて言葉にして伝えることが大事。伝えるということは相当考える必要があるので、そこまでできていれば強い大人になると思います。聴く側としても、面白がって聴けるようになるとよいですね。自分にないものをつかみ取る。自分の考えを持つということに探究の時間を使ってもらえればと思います。

・経営者の視点から、うちの社員になったらどうなのだろうなという観点で見ることが多いですが、今日の生徒さんたちは、ある程度は十分に仕事をこなせるだろうと感じました。世の中いろんな困難がありますから、それにぶつかったときにどうするか、乗り越えられるかが大事なことではあるのですが、今日の生徒ならできるのでないかと思い

ました。他県の高校との交流、生徒が新たな体験をできるような教育を続けてもらえれば、世界に通用する生徒が育つのではないかと思います。

市役所との連携事業について

⇒政策企画課として教育委員会と、担当課や担当との連携がうまくいかないところがあると感じるがありましたので、そのあたりを今後も改善していければと思っています。

⇒市や区のイベントに企画段階からかわらせてほしいと、生徒から意見が出てくるようになりました。

## 2 学校設定教科「必由学」の設置及び探究的な学習の充実に向けた取組

### (1) 『「総合的な探究の時間」における市役所・外部連携』

ア 目的：総合的な探究の時間において、「環境」「経済」「観光」をはじめとした全9分野に分かれ、熊本市の協力のもと、市の取組内容や課題について分野別に職員から直接話を伺い、その後各分野で聞いた内容や視点をもとに、生徒たち自ら課題を見つけ、年間を通じた探究学習を行った。

1, 2 学年合同での実施となり、1 年生は協働的課題解決能力の育成、また 2 年生は自らの進路や自己実現を目的とする。

#### イ 協力

熊本市役所

- ・環境政策課 ・廃棄物計画課 ・水保全課 ・脱炭素戦略課 ・商業金融課
- ・雇用対策課 ・観光政策課 ・空き家対策課 ・都市デザイン課 ・文化財課
- ・熊本城総合事務所 ・スポーツ振興課 ・デジタル戦略課 ・国際課
- ・教育センター ・地域教育推進課 ・こども政策課 ・高齢福祉課
- ・JICA デスク熊本

#### ウ 実施内容

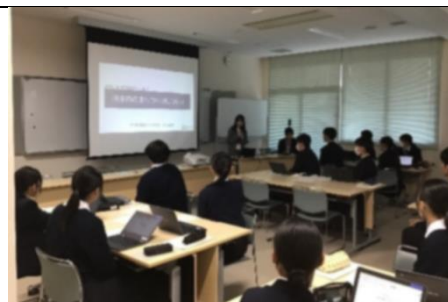
水曜の 7 限目（15：25～16：15）の総合的な探究の時間に実施

	日程	第 2 学年	第 1 学年
第 1 回	5月31日	<p>予めいくつか興味のある分野にわかれた分野別クラス編成をし、その分野について関わりのある課から、取組内容や課題となっていることについて話を聞く。</p> <p>【講義内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各課のミッション（どのような内容に取り組む課なのか）</li> <li>・具体的な取り組み（日常の業務の中での具体的な取組をいくつか紹介）</li> <li>・どのような課題があるのか</li> <li>・生徒に考えてほしい具体的な課題を提示</li> </ul>	

第2回	6月21日	生徒の探究計画へのアドバイス ・生徒が見つけた問い、探究の計画について、調査方法や問いに対する視点など、生徒の活動を観察し、仮説に対する探究の方法等適宜アドバイスをいただく。 ・全体講話ではなく、生徒の活動を見守り、アドバイスをさせていただく時間。	
第3回	10月4日	文化祭で中間発表（市役所等から講評者として参加）	
第4回	11月頃	アドバイザーとして来校	
第5回	1～2月	クラスや学年での発表を参観	
第6回	3月11日	成果発表会 代表の最終発表を参観・指導・助言	

○1 学年は課題を提示してもらい、グループで課題探究型の学習を行う。

○2 学年は自ら問いを設定し仮説や検証方法など自分で探究の計画を立てる個人での課題探究型学習を行う。



#### エ 成果発表会（第6回）

《代表発表のテーマ》

- ・「地域から学び熊本市の今を知る」 フットパス企画チーム
- ・「AI は教育にどのような影響をもたらすのか」 個人探究
- ・「中小企業と社会貢献」 ビジネスプラン企画チーム
- ・「人があふれる熊本市」 個別探究
- ・「熊本幸福論『エモーショナルなストーリーのマーケティング2023』～ツールド・フルーツの提案～」 第4回 SB Student Ambassador 全国大会九州代表チーム
- ・「生徒会より 他校の実践例より学んだこと」 生徒会執行部

《各課からの感想》

・具体的に考えられているものばかりで、「自分が高校生の時はこんなに考えられたかな」と、とても感心させられました。きっと、生徒たちの大きな財産になると思いますし、今回の機会で、私自身大変勉強になりました。

・5名の発表はどれも素晴らしく、観衆への問いかけ、データ活用、企業の方との対話を踏まえた内容、自身の考え、などなどなるほどなあと感心するばかりでした。





・最後の生徒会長らの発表を聞きながら、「共創」という言葉が頭に浮かびました。教員も生徒も、共に良い必由館を創る姿勢が表れるものと思いました。この2名が東京に視察に行くだけでなく、日ごろから様々な点で、教員と生徒と一緒に考えながら新しい必由館を創るということを垣間見て、共創を気づかされた発表でした。そして、このような必由館に1年間寄り添えさせていただいたことに感謝申し上げます。

## (2) 『Student Agency PechaKuchaNight くまもと 2023』

ア 日時：令和5年8月19日（土）10時00分～15：00

イ 目的：キャリア教育の一環として、ソーシャルアントレプレナーシップの醸成を目指す。このため、各校及びきょうそうさんかくたんけんねっと（KSTN）所属の学生・生徒それぞれが捉える社会課題に、主体的に取組み、課題解決に向けICTを有効に活用してプレゼンスピーチを行うことで、よりよい人生と豊かな社会の実現を可能にし、自ら変革のための行動を起こすコンピテンシー、Student Agencyの向上を図る。

ウ 研修場所 熊本市 XOSSPOINT

エ 参加校

熊本市立必由館高等学校 熊本市立千原台高等学校 熊本県立宇土高等学校  
北九州市立高等学校 宮崎県立飯野高等学校 静岡県私立浜松学芸高等学校  
熊本市立北部中学校 熊本市立桜山中学校  
東京学芸大学 福井大学 角川ドワンゴ学園S高等学校

オ 生徒の感想

・私は、「JICAとこれまでの経験」についてプレゼンテーションを行いました。当日は緊張と不安で上手く発表することができず、悔しい思いをしました。他のプレゼンターの発表を聞き、冷静に自分の発表を振り返ると、練習量がまだまだ足りていなかったこと、聞く側の反応を見る余裕がなかったことなどの反省点が多くありました。実際、他のプレゼンターの発表は、アイコンタクトや抑揚の付け方などの表現力がとても豊かでした。他のプレゼンターを観察することで、私が行ったプレゼンテーションで不足している部分に気づくことができました。

良いプレゼンテーションを行うためには、事前準備をより入念に行うことが重要です。そうすることで自信が生まれ、緊張を和らげることができます。また、アイコンタクトやジェスチャーなどの非言語コミュニケーションを上手く活用することで表現力が上がり、説得力が増すことがわかりました。

反省する点は多くありましたが、結果的に良い経験となりました！これを活かして、受験や将来人前で発表するときなどに活用していきます。

・司会を経験して、臨機応変に対応する能力が身についたと思います。各校のプレゼンの後に感想を一言言うのは少しテンパってしまいましたが無事に乗り切ることができて良かったと思います。貴重な経験をさせて頂きました。

他校の生徒のプレゼンを聞いて、SB 国際会議に活かせそうなテーマのところもあり参考になりました。またこの様なイベントがあるといいなと思いました。・

・他の人の発表を聞いて、自分に足りない知識や、それぞれのプレゼンの発表のいいところを見つけることができた。

・今回の登壇で、始めてプレゼンをして自分の話をどう人に伝えるか、どのようにしたら伝わりやすいかについて考えることができ、プレゼンのスキルを得ることができた。他の生徒この発表を聞いても、自分には何が足りないか知ることができた。例えば表情の付け方や声のトーン、動きなど。また、他校の部活動や探究活動の話聞いて、同じ高校生でも企業と連携して活動をしていてとても興味深かった。・

・登壇者の方々の発表を聞いて、もし 20 秒に足りなかつたり、時間が余つたりした時に咄嗟に話題を提供したりしているのを見て、その場で思いついたことをパツと言えるのがすごいなと思いました。また今回の司会を通して、自分も少しは危機に対応する能力が身についたのかなと思いました。今回参加して良かったです。

・他の学校の発表を聞いて総合探究にも使える発見が多かったので参加して良かったです。

### (3) 『Student Agency 阿蘇実地研修』

ア 日時：令和5年8月19日(土) 17時30分

～令和5年8月20日(日) 16時00分

イ 目的：OECD の Education2030 プロジェクトの理念に共鳴し実現を目指す KSTN の地域エコシステム及び普通科高校改革等に取組む学校の学生・生徒等が、『Student Agency PechaKuchaNight くまもと 2023』について具体的に振り返り、さらに今後の教育の在り方や教育改革等の社会課題に目を向け、意見・発表や交流を行う。また、直接阿蘇を学びのフィールドに、ESD の視点で持続可能な社会の創り手として、専門家の話を聞き、見学し、意見交換を行うとともに、それぞれの学校に係る改革の在り方や今後の ICT の活用等について、自由闊達に情報交換する機会とする。

ウ 研修場所

阿蘇地域(国立阿蘇青少年交流の家・阿蘇神社・ジオパーク・震災ミュージアム等)

エ 参加校

熊本市立必由館高等学校 北九州市立高等学校 宮崎県立飯野高等学校

静岡県私立浜松学芸高等学校 KSTN 地域エコシステム

東京学芸大学 角川ドワンゴ学園 S 高等学校の学生・生徒及び教師

オ 生徒の感想

・他校の生徒との交流がとても楽しかったです。全然話したりませんでした。とても親睦が深まったのでまた同じ学校同士で集まりたいです。私は熊本県民であるにも関わらず、どこにも行ったことがありませんでした。特に震災ミュージアムでは当時の姿のままの建物が残されており、災害の爪痕を直に感じる事が出来ました。ロビン像も見れ

て嬉しかったです。阿蘇山火口では硫黄の臭いがとても The 火山っぽくて少しテンションが上がりました。

・これまで他県の高校の人達と関わることなんてほとんどなかったので、今回の PechaKuchaNight のことで意見交換をし、単純に仲良くなることができて貴重な経験ができて嬉しかったです。

・ PechaKuchaNight について他校生徒と考えた際、特にプレゼンの仕方について同じ意見が多くあり、たくさん話を共有できた。また、逆に自分が気づかなかった点も他のグループの話を聞いて知ることができた。火山博物館では阿蘇山のことについて学び、熊本に住んでいながらも知識がとても少なかったので、学ぶことができてよかった。KIOKU では、防災について学びこれから自分たちができることがわかった。それを他県の生徒と話し合うことがとても良かったと思った。

・ 青少年の家での交流の時間で他校の人たちと、プレゼンでは知ることのできないもっと詳しいことや、他の県、それぞれの学校のことなどを話して、自分が知らなかったことをたくさん知るいい機会になったし、自分たちについて知ってもらういい機会にもなった。

(4) 『フットパスその理論と実践 ～歩くことで地域を学ぶ～』

ア 特別講師：(株)美里まちづくり公社マネージャー 濱田 孝正 氏

イ 日時：令和5年10月25日(水) 11月1日(水) 8日(水)

日時	授業内容	振り返り	使用教材
10月 25日	【流れの確認】 今回の活動の目的と今後の流れの話を聞く。	どんな活動をしていくかを知り、今後の流れをイメージできたと思う。	Chromebook
11月 1日 11月 8日	【フィールドワーク】 学校周辺を歩き、コース作りのための材料を探す。	学校の登下校では通らない道を歩くことで、今まで気づかなかったことを発見できたと思う。	
11月 15日 11月 22日	【コース作成】 班に分かれて地図を見ながらコースを考える。	どの班も参加者にどのようなアプローチをしようか考えて取り組んでいた。	Chromebook 地図
12月 6日	※1年生のみ 【地域教育について】 地域教育についての説明を受ける。	地域教育の説明は前にもしていただいたが、前回とは違った視点で説明を聴き考えることができたと思う。	Chromebook
12月 13日	【コース作成・ 必由館紹介資料作成】	各班が決めたコースをみながら、一つに絞った。生徒	Chromebook 地図

12月20日 1月10日	班に分かれて地図を見ながらコースを考える。必由館の紹介内容を考える。	で話し合い紹介で話す内容を決めた。高校について新たに知ることができたと思う。	
1月21日	【Kumamoto Education Week フットパス 企画当日】 参加者の方々とフットパスのコースを歩く。 必由館高校紹介。	実際に参加者と歩くことで、いろいろ話すことができた。また地域教育と言うものを実感できたと思う。	紹介用台本

## ウ 生徒の感想

・今回の総合的な探究の時間の教育分野の取り組みをとおして、自分自身学んだことや思ったことが2つあります。

1つ目は社会教育（地域教育）の大切さです。自分自身今回の総合的な探究の時間を行うまで、学校教育しか知らず、社会教育という言葉を知りませんでした。

社会教育は今の学校教育よりも自分自身の身近に大きく関わっていて、あまりにも身近過ぎて社会教育の存在に気づく事ができていませんでした。

この社会教育の大切さに気づけたのは熊本市教育委員会の小原さんを始めとする、教育委員会の方々や濱田さんのおかげだなと感じています。

総合的な探究の時間のスライドでも発表したのですが、特に学校教育とは知識の定着がメインとなるのですが、社会教育は自分自身で外に出ていき自分の力で様々なものを感じ、自分の興味があるもの、ことを見つけることができるため自分とは何なのかの自己実現につながる大切な教育なんだと感じました。

2つ目は、親子フットパスマスのイベントです。

当日は僕自身、自分の都合でイベントに参加することができなかったのですが、イベントを行うまでの過程で、すごく勉強になった部分もありましたし、自分自身の成長をフィールドワークをとおして感じる事ができました。

これらのことから自分自身、将来中高の英語教員になりたいと考えているのでこの社会教育の大切さを未来の子どもたちに伝えていける教員になりたいです。

・私がKEWの活動で学んだことは、仲間と協力し一つのことをともに作り上げる喜び、地域の特色や魅力を理解できたこと、それを私たちが今後伝えていく義務があること、地域を知り街を知り人を知ることなどが大切だということです。仲間との連携は、個々の力を合わせてより大きな成果を生み出すことができることを実感しまし



た。一つの目標に向かって努力し、成功を共有する喜びは、一人では得られない貴重な経験です。また、地域の特色や魅力を理解することは、その地域に根ざした文化や人々の暮らしを尊重し、地域の魅力を最大限に活かすことができる基盤となります。さらに、私たちは地域の豊かな魅力を他の人々に伝える責任があります。地域を知り、街を知り、人を知ることは、他者との交流を通じて新たな視点を得ることができるだけでなく、地域社会に貢献することができる重要なステップです。このような学びを胸に、私たちは地域社会への貢献や発展に向けて積極的に行動していきたいと思えます。

## エ まとめ

今回の総合的な探究の時間で、地域教育という言葉を初めて知ったという生徒が多かった。そこで今回地域教育の担当になった生徒たちは、どうすれば多くの人に地域教育を知ってもらえるのかということを中心に活動を行った。Kumamoto Education Week のフットパス企画に参加させていただいた。そこでコース作りや学校説明の内容等を考えることで、地域教育を生徒たちも実感することが出来た。また、活動の中でどうすると地域教育をより知ってもらえるかを考えるきっかけになった。



## (5) 『第4回 SB Student Ambassador ブロック大会（九州大会）への参加』

ア 日時：令和5年11月12日（日）

イ 目的：サステナビリティに関連した最先端の活動に取り組むオピニオンリーダーやサステナビリティ先進企業で活躍する人たちの講演を聞いたりするだけではなく、能動的にサステナビリティと関わる機会が得られ、また、同世代の高校生同士の交流や高校生の立場から意見を発表する場が用意されている。探究的学習を深化させるとともに、生徒の資質・能力を向上させる機会とする。

また、参加後、論文選考会を経て、「サステナブル・ブランド国際会議 2024 東京・丸の内」で実施する全国大会に九州代表として出場することができる。

ウ 研修場所 福岡大学

## エ 感想

(ア) 九州ブロック大会に参加しての変化

- ・人前で発表することが苦手だったが、SB 会議に参加して人前で発表することに抵抗がなくなったり、発表する時は聞く人の方を見て話したりするなど、話す時の工夫の仕方学べました。
- ・初めて会った人にも自分から積極的に話しかけることができるようになりました。

・他の学校の人達とも交流しながら一つのディスカッションテーマについて話し合うことができ、みんなの前や全体で発表することが苦手だったけれど、活動を通して力を付けることができました。

・ファストファッションが一番印象に残りました。良くも悪くもいろんな国と関わっていることがわかりました。参加前は特に児童労働に関心がありましたが、環境に関するSDGsにも興味が湧きました。できれば来年も参加して論文を応募してみたいと思いました。

・基調講演を聞いて、自分の進路選択の意識が変わりました。

・改めて熊本に関する観光を深く考えたいと思いました。

・参加する前は、SDGsについて深く考える機会があまりなく、私にはそこまで関係のないものだと思っていましたが、これからの世界がより良くなっていくためには、今生きている人全員がSDGsに関係するということが分かり、環境に良いことを心がけるように生活しようという意識が変わりました。

#### (イ) 九州ブロック大会に参加後、自分の探究にどうつながるか

・問いを見つけて、それについて1方面だけでなく様々な立場から考え、答えを出すという探究活動の過程がこれからの探究に活かせると思いました。

・意見の出し方などを考えていきたいです。

・探究の問いに対する結論の出し方や、結論に導く方法などを学ぶことができたのでこれから使っていきたいと思いました。

・今の考えだけでなくもっと多様な考えと繋げていきたいです

・たくさんの情報を得ることができたので、自分の探究の内容と環境を関連付けやすくなると思いました。

・熊本市の観光を作るにあたって環境に配慮した観光を作るにはどうしたら良いか、また、熊本市に貢献するためにはどうしたら良いかなど考える材料ができました。

・手段と目的を区別して、明確な意見を述べて探究していくことにつながると思いました。

・ターゲットを絞ったりすることが大切だといった学びを、自分たちの探求に繋がれると思いました。

・将来の地域創生やSDGsに繋がると思いました。

・これからの時代においてSDGsは欠かせない存在となっていくと思うので、SDGsに絡めた思考で様々な問題を解決することに繋がっていくと思いました。

#### (ウ) テーマ別研修の感想

・株式会社セレスポさんの話をきいて、イベントには目的があり、さまざまな役割があるとわかりました。セレスポさんの考え方や会社のことについて知ることができて面白かったです。

・他の学校の方と交流しながら、ディスカッションテーマについての考え方がとても深掘りされていて感動しました。私達は「どうすれば学園祭がより良くなるか、2030年



の学園祭はどうなっていてほしいか」で意見交流をしました。考えたことがなかったの  
で難しかったけれど、率先して意見を出してくれた方がいたのでスムーズに話し合いを  
進めることができました。

・JRの取り組みとしてまちづくりを挙げており、自分たちでは想像できない大きなイ  
ベントなどをされていてとても驚きました。「音楽でまちづくり」はとても楽しそうな  
イベントで行ってみたかったです。

・他校の生徒と交流を深めながら自分の学びたいことを学べる有意義な1日  
でした。最初はうまくコミュニケーションを取り、仲良くなれるか不安でし  
たが、お互い学びたい意欲満々だったのですぐにうち解けることができました。また、  
広紙にまとめる際も全員の意見を取り入れることができたので良かったです。



・グループで意見を出し合う時に「私がこの考えは結構良いのではないかと」思った意  
見を言ってみると、意外と反応が薄く、逆に「私はその考えは少しテーマから脱線して  
いないか」と思った他のメンバーの意見に対して反応が大きかったので、人の考えは、  
本当にそれぞれ違うなと改めて感じました。

・グリーンホテルは様々な形で地域と共生していて、コラボレーションルームを作られ  
ていて、感動しました。ディスカッションでは、初めて会う人と話しをするのは人見知  
りのため少し抵抗がありました。しかし、ディスカッションが始まり一緒に考えを深め  
ていくうちにとても楽しくなり、不安もすぐなくなりました。「地域貢献できるホテ  
ル」というテーマに対し、私達が考えたことをグリーンホテルの方が褒めてくださり、と  
ても嬉しかったです。

・県外の高校生とたくさんの交流ができて、  
大変勉強になりました。私は、食べ物と観光  
を繋げたグループでしたが、是非とも学校の  
探究グループに持ち帰りたいと思った「なる  
ほどな」と感じるような意見が多くあり、他  
の人にも勧めたい研修でした。



#### (エ) 全体の感想)

・他の県の高校生とたくさんコミュニケーションをとり、貴重な公演も聞けてよかったです。

・初めての経験だったけれど、たくさんの講演を聞きながら世の中でどのように企業が  
活躍しているのかを知ることができた。

- ・友だちも増え、いろいろな人の考えを知ることができました。また、他県の高校生と交流して、発想の違いなどがあり、新鮮でした。
- ・SDGsに関する取り組みや活動に参加し、意見交換をしたいと思っていたので実際に参加することができてよかったです。
- ・私が一番興味を持ったのは基調講演です。他にもグリーンホテルさんのアメニティーのプラスチック 100%をやめるという取り組みも面白いなと思いました。ホテルのアメニティー（歯ブラシや櫛、カミソリなど）に穀殻が使用されていて見た目も少しおしゃれになっていて一石二鳥だなと思いました。
- ・いろいろな人がいて、その分いろいろな考えがあつてたくさんの意見を聞いて楽しかったです。
- ・今までにない考えなどに触れることができました。また、新しい学びが増えました。
- ・あまりこういうものに参加したことがなく、不安がありましたが、参加してみてグループの様々な意見に影響を受け、私も学校での探究の授業を頑張ろうと思いました。

(6) 『音楽を通して高校生のキャリア形成、地域社会へ積極的に関わろうとする態度の醸成を目指す』

ア 目的：教育分野に関心をもった生徒が、熊本市が開催する KEW 期間中のイベントを生徒主体で企画し、その活動を通して生徒自身の学びを創出することを目的とする。

イ 活動概要

- ・グループに分かれて、プロジェクトに挑戦する
- ・Kumamoto Education Week（以下 KEW）のイベント企画チーム

(ア) イベントを企画する

目標の整理

KEW が目指すところは「豊かな人生とよりよい社会を創造するために自ら考え主体的に行動できる人を育む」ことであり、これについて生徒と参加者とで音楽の視点から考えていくことが今回のイベントの目指すところである。イベントは探究プロセスの「情報収集」「検証」に相当する部分で、イベントの成功が探究のゴールではない。イベントを通して生徒が自身の学びを深め、最終的にそれについて発信し、自己の在り方生き方を考えながら次の探究へつなげていくことが本来のゴールである。

しかし、生徒はそのことを見失いがちなので、プロジェクトチームでの最初の活動の時間は、教師がファシリテートしながら目標の整理にしっかりと時間をかけ、イベントの目標と、総合的な探究の時間の目標とを明確にするよう留意した。

教育分野に関心をもっている生徒の一人は「地域教育は子どもたちの教育にどんな役割を果たしているか」という「問い」を立て、KEW 音楽イベントの企画・実施を通してこれを探究していった。

どのようなイベントにするか、準備すべきことを考える

目標が定まった生徒たちは、次のようなイベントを考えていった。

- ・対象は主に高校生以下の「子ども」 参加者 30 人程度の会



- ・「若者を応援する歌」を自作し、披露するとともに、その曲の演奏に簡単な打楽器等で加わってもらったり、一緒に歌ったりしてもらうことで、「リスナーとプレイヤー両方の楽しさを味わえる音楽イベント」にする。
- ・主に小学生を中心とした音楽経験が少ない人向けの第1部と、楽器経験者のみを対象に楽器を持参してもらって合奏を楽しむ第2部の2部制にする。

この実現のために必要な準備として、生徒たちは次のようなことを考えていった。

- 歌を作曲（歌詞の募集・構成、歌・楽器パートの作曲、メンバー集め・パート決め）
- 演奏の練習 ○楽器等の手配 ○会場の借用、使用する設備等の確認）
- 広報活動（フライヤー作製、ホームページでの紹介、参加申込管理）

教師は生徒のアイデアに対して意図を尋ねて考えを深めさせたり、広報活動などアイデアが不足している部分については示したりした。また、スケジュールについては学校行事等との兼ね合いを示して実現可能な日程を考えられるよう支援している。

#### (イ) イベントの準備をする

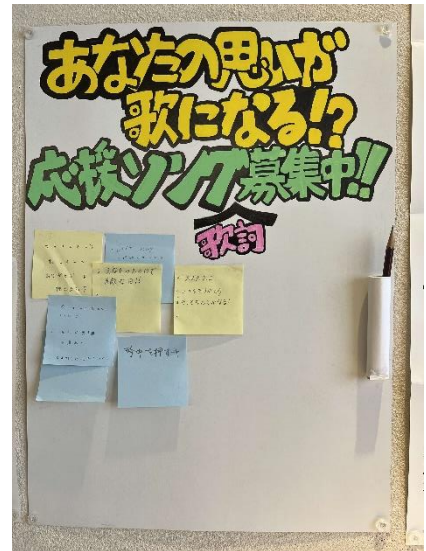
以下は、前段に示した準備を生徒たちが自ら進めていく中で特長的だった取り組みと、その際の教師の伴走である。※教師の伴走は斜体文字

##### ○歌詞の募集・構成

生徒は熊本市のより多くの人に関わってもらいたいという思いから、歌詞の言葉を校内や街中で公募して構成することを考えた。校内においては各クラスのホームルームの時間にチームのメンバーが説明に回り、プリントを配布して歌詞を募った。

※教師はKEW イベントに協力している書店や現代美術館と生徒をつなぎ、歌詞募集のポスターを置かせてもらえるよう、生徒自ら交渉する場をセッティングした。

「若者を応援する歌」というコンセプトを示したポスターに付箋を貼ってもらう形で、5日間ほど募集したところ、十分な量の言葉が集まった。生徒は集まった言葉から、伝えたい内容を考え、歌詞に構成していった。



##### ○歌パート、楽器パートの作曲

※歌の作曲に当たっては、プロの作曲家に伴走を依頼し、作曲前と作曲過程でオンライン・ミーティングを実施して音楽づくりのアドバイスをもらえるようにした。

作曲家の実体験をもとに、市民の Well-being 醸成のために、社会課題について芸術表現するプロジェクトの価値を話してもらったことで、自分たちの音楽イベントの価値について考える



ことができていた。また、歌詞に対してのリズムやメロディの考え方、楽器編成や調性、構成とコードなど、音楽そのものについての具体的なアドバイスをもらうことができた。

特別講師：名古屋音楽大学 特任准教授 松波 匠太郎 氏

第1回（12月13日）

「市民のWell-being醸成のために、社会課題について芸術表現するプロジェクトの価値について」

第2回（12月27日）

「社会課題を踏まえた芸術表現の実際について」

作曲への関心が高かった4名が分担し、

・歌の旋律・ピアノ・内声の管楽器・ドラムそれぞれパートを作って曲を完成させていった。

※それぞれが自宅のPCアプリで作成したため、教師が学校でその楽譜を集約し、総譜とデモ音源を作成した。

#### ○会場の借用、使用する設備等の確認

※KEWの予算から本イベントに10万円確保し、生徒にはその枠内で会場費や運搬の費用等を全て収めるように伝えた。

生徒は会場までのアクセスのよさと規模を考慮し、街中の小ホールを複数調べて候補を挙げ、実際に下見に行ってホールを押さえていった。併せて必要な楽器や機材、運搬方法についても考え、学校の備品等を確認して、校長や吹奏楽部への借用許可を取っていった。

※下見は総合的な探究の時間内に行い、教師も同行した。付帯設備の料金や支払いの方法等は、教師も共に確認した。

#### ○広報活動（フライヤー作製、ホームページでの紹介、参加申込管理）

生徒は自作フライヤーの校内配布や知人の店などに掲示することを考え、校長の許可を経てこれらを行っていった。参加申し込みについては生徒がGoogleformで作成し、QRコードをフライヤー等に掲載して受け付けるようにした。

※フライヤーについては著作権に関する点検を行った。問題があるイラストが含まれていたため、生徒へ著作権について指導し、改善を促した。

また、生徒のアイデア以外にKEWのホームページでの情報発信、熊本市役所SNS上でのお知らせについては教師から提案し、実施した。

申込formをはじめ、楽譜やでも音源などはGoogleClassroom上で共有し、生徒も担当教員も見ることができるようにして利便性を高めた。

#### (ウ) イベントを開催する

※今回のイベントは単なるコンサートではなく、楽器体験と合奏も含むため、授業と同じように趣旨説明や場の設定、グルーピング、参加者の活動を支援する生徒担当者や道具等も詳細に考える必要がある。生徒が網羅的に考えるのはかなりハードルが高いと判断し、前々日から前日にかけて、生徒と教師とで詳細にシミュレーションを行い、準備が足りていない部分について生徒に気づかせていった。

シミュレーションをもとに、生徒は「搬入・搬出の段取」「進行台本」「楽器体験時の参加者割振と支援担当者」「体験活動時の場づくり」「アンケート」の必要性に気づき、これらを準備することができた。

### 《第1部》

高校生以下約30名、保護者・一般約40名

- ・イベントの趣旨説明
- ・オリジナルソング「きっと」の披露
- ・簡単な合奏体験  
(小物打楽器類、ハンドベル、ピアノ、グロッケン)

・「きっと」の歌部分を練習してみんなで合奏  
子どもから高齢の方まで参加があり、生徒が関わりながら楽しく合奏する姿があった。参加者同士、教え合う姿もたくさん見られた。



### 《第2部》

高校生以下約10名、保護者・一般約10名

- ・イベントの趣旨説明
- ・オリジナルソング「きっと」の披露
- ・各自持参した楽器で「きっと」を練習
- ・「きっと」をみんなで合奏

楽器経験者を対象とし、「きっと」をこの日限りの編成で合奏した。

生徒が参加者に寄り添って練習し、合奏を楽しむことができていた。



### (エ) 活動と学びについてプレゼンテーション

イベント後は、各学級で探究活動のまとめとして、自分の活動と学びについてプレゼンテーションを行った。「地域教育は子どもたちの教育にどんな役割を果たしているか」という問いについて探究していた生徒は、次のようなことを語っていた。

- ・子どもも大人も私たちもとても楽しんでいた。
- ・イベントを通じて音楽の楽しさを感じることができていたと思う。
- ・様々な年齢の人たちが音楽を通じてつながるよさを感じることに価値がある。
- ・学校だけではこのような体験はできないと思う。
- ・高校生が企画運営することで、大人がやるよりもイベントの効果が高まると思う。
- ・音楽イベントの他の形も考えてみたい。



### ウ 生徒の感想

・本番ぎりぎりの参加だったのですが、友達や後輩が企画したイベントと一緒にすることができ、とても楽しめて、たくさんの今日初めて会った人と音楽をできたので充実した時間になりました。高校生が主催のイベントは初めてで、他にはない形のイベントができてよかったのではと思います。また、来てくださったお客様も親子で楽しんでいただけで音楽の楽しさも知っていただけたと思うので良かったです。企画から練習、イベント本番までをグループですると達成感や次もまたやってみようという気持ちになれたと思います。高校生主催ではあるものの沢山の人の協力によって曲が完成したり会

場で開催できたりしたと思うので、これからまたすることに協力してもらうためにも、今日感じたことや考えたことを忘れないようにしたいです。今回行ったイベントで見つけた課題点や改善策があるのでそれを活かせるイベントをまた出来たら嬉しいです。幅広い世代の人が楽しんで参加できるように開けた広場でするのも楽しそうだなと思います。音楽は沢山の人を繋げられるものだと思うので今回より沢山の人で開催できる企画を試みたいです。

・この活動を通して人とつながることの大切さや、音楽の可能性について感じる事ができました。他の分野よりも長い時間を利用して企画を進めなければいけなかったので、大変だったなあという気持ちが一番大きいです。でも時間をかけた分だけのこの分野でしか得られないものがあったと思います。

・KEWを通して、人との関わりやトラブルの対応について学びました。計画と当日の企画中では、想定外のことが起きたり、うまく行かなかったりしたこともあったけれど、他のメンバーと支え合って、困難を乗り越えられたと思います。そして、KEWにご参加いただいた方たちとのつながりを感じることができました。今まで知らなかった人たちと関わり合い、輪が広がっていくのを、肌で感じられたと思います。また、イベントの企画・運営に際して、報告・連絡・相談の重要性を学びました。私は、地域教育について探究しています。探究の中で、フィールドワークに行き、イベントの企画・運営を通して、大変だったことも多かったのですが、探究がなければ出会えなかった人や価値観・考え方に会うことができたと思います。私は元々人見知りで、内向的な性格でしたが、探究の活動を通して、他の人と協力し、積極的にコミュニケーションを取ることができるようになったように感じます。そういう意味では、学校の教科の中で、将来の人生に一番関わっていく教科なのではないかなと思いました。

・その他では、聞いたことを元に考察したり、新たな問題点を考えたりする思考力や、考えたことを言葉や文、スライドとして形にする表現力が身についたと思います。とても貴重な体験ができたのではないかと思います。今回のイベントでは小さい子どもからお年寄りまでの幅広い世代の方々と同じ時間・同じ場所で接するという機会は滅多にないと思うし、実際私は今までありませんでした。また、ドラムの事を教えてくださった方には今回のイベントに参加しなければ出会えなかったかもしれないし、会ったとしてもこんな感じで話すことはなかったと思うと、とても大事な経験だったなとしみじみ感じました。そして、これからの人生色々な人似合うと思いますが、この経験を通して一期一会を大切にしていきたいです。作詞、作曲には携わっていませんが、イベントと一緒に運営した事で、私もこのようなイベントを開催することになる場合の参考となる経験でした。

・イベントを開くことの大変さ、一から段取りをすることの大変さ、色々学ぶことができました。成功した時の嬉しさはとても大きいものでした。貴重な体験、本当にありがとうございました！自ら、考え行動する。この力はこれから生きていく上でとても大事な力だと、探究していて改めて気づきました。来年度は、もっとレベルアップした音楽イベント、作曲、披露などを行なって、音楽を世界に広げていきたいです！

純粹にとっても楽しかったです。イベントを通して、参加している人の笑顔を見ることができて、私達の目標を少しは達成できたかなと思いました。今回の学びとしては、改めて大きな会場で人を集めて、1からイベントを開くことの難しさを学びました。私は、将来、舞台やライブの裏方をやりたいという夢があるので、自分の将来にも通ずる



ことがあり、本当に学びの多い時間でした。今回の活動を活かして、来年ももっと規模を大きくやってみたい。

・企画を考える所からはじまり、イベント内容を掘り下げたり、作詞作曲をしたり、など一つのイベントを行う大変さを身にしみて感じました。特に私は企画発案者のため、自分のやりたいイメージをメンバーにわかりやすく伝えることや、イベントを通して「音楽の楽しさと魅力」を実際に演奏して感じてもらうという方向性がブレないようにすることなど、限られた時間の中これをするのはとても困難でしたが、いい経験となりました。一部・二部両方楽譜制作を行いながら自分たちで作る、0を1にするということの難しさをより感じました。

#### エ まとめ

プロジェクト型で音楽イベントを取り扱う場合、活動の構造が複雑になり、内容が多岐にわたる。時間的な制約もあるため、生徒が気づけていない視点については、ある程度教師から示して具体を考えることができるように誘っていく必要があると考える。また、特に重要なのはイベントのゴールと探究のゴールを明確にできるよう支援することだと思う。この他、外部との連絡、金銭面、著作権、スケジュールに関するところでのサポートも重要である。

### (7) トークセッション『若者の「探究力」をいかに育むか』

ア 特別講師：東京大学 教授 鈴木 寛 氏

イ 日時：令和6年1月23日（火） 14：00～15：30

#### ウ 目的

鈴木寛氏を迎え、熊本市立高校2校の実践発表を行うとともに生徒や教師と今後の総合的な探究の時間の在り方や可能性についてトークセッションを行うことにより、探究型学習の重要性や有益性を再認識しさらなる授業の充実を目指す。



#### エ 参加者

- ・熊本市立必由館高等学校 2 学年生徒 2 名 教職員 1 名
- ・熊本市立千原台高等学校 1 学年生徒 2 名 教職員 1 名

#### オ 概要

- ・市立高校の総合的な探究の取組について
- ・市立高校 生徒実践発表
- ・トークセッション

「探究力」学ぶための仕掛けづくり  
生徒はどんな力がついていると感じているか  
社会（企業、官公庁）との連携について  
鈴木氏からの質問やアドバイス

## カ 生徒の感想

・今回トークセッションを通して、鈴木寛先生のおっしゃる「自分の本当に好きなことを探究する」という点が一番印象に残りました。私は幼い頃からゲームが大好きなので、好きなARと好きなゲームを組み合わせ、それを地域貢献できる形にしていくと、自分も楽しく制作でき、周りの人のためにもなる、最高の探究ができる可能性を見出すことができました。

・今回は、鈴木先生を交えたトークセッションという貴重な機会を頂けて嬉しかったです。トークセッションを通して、千原台高校さんの探究の取り組みについて聞くことができ、企業との連携やSNSの活用など、興味深い活動がたくさんあることを知ったので、必由館にも取り入れたら良いのではないかと感じました。また、鈴木先生のお話から、探究の切り口は色々なところにあることを知れたので、日常的に色々な事象に興味や疑問を持ち、考察してみようと思います。探究と自分の将来の目標との関わりについて改めて考える機会となったと感じました。今回のトークセッションで、鈴木先生を含め様々な方に色々な視点をいただいたので、今後の探究や人生に活かしていきたいです。



## キ 職員の感想 実践発表・トークセッションを終えて

鈴木氏に生徒の具体的な実践例と生徒の声を聞いていただく機会となったこと、市立高校2校それぞれの取組を同じ場面で発表でき、その価値づけを鈴木氏にさせていただいたことで生徒に有用感のある学びになっていたと感じる。生徒の興味関心は幅広く、私たち教師も授業のコーディネートについては試行錯誤の日々である。その中で、様々な学びの形態や可能性を示唆していただき、生徒ともにその価値を再認識できたことは今後の本校の教育活動につながる大きな成果だった。

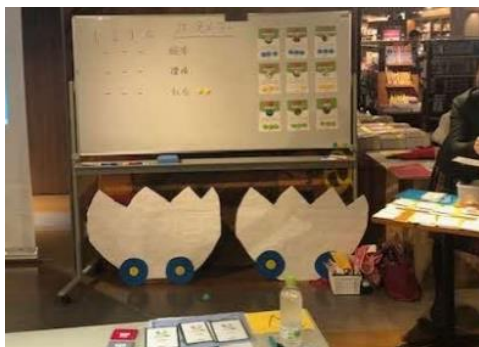


## (8) 外部企業（書店）とのコラボレーション企画

ア 目的：教育分野（地域教育）に関心をもった生徒が、熊本市が開催するKEW期間中のイベントを生徒主体で企画し、その活動を通して生徒自身の学びを創出することを目的とする。

## イ 目的

近年、生活環境の変化や様々なメディアの発達・普及、デジタル化等の背景により、読書離れが問題となっている。そこで、この問題を解決するためにはどうするかを考え、「本に興味を持ってほしい」「本屋に立ち寄ってほしい」「必由館の魅力も伝えながらなにか企画をしたい」という生徒の思いから、「絵本の世界観を現実に」「本の題材を芸術で表現」「SDGsの観点を取り入れた端切れの葉」「高校生が選ぶおすすめ本の紹介」の企画を考え、KEW 期間中に書店地下イベントスペースにて展示・配布を行った。



## ウ 取組の概要

日時	授業内容	振り返り	使用教材
9月27日	<p>【KEW オリエンテーション】</p> <p>古川先生より外部企業（書店）とのコラボレーション企画・アーバンフットパス・音楽イベントの3分野の企画についての説明を頂く。</p> <p>今後の探究活動について考える。</p>	<p>教育分野の地域教育について探究学習を行っていた生徒に、新たにKEW 企画の3分野についての説明が行われた。フォームでアンケートを取り、これまでの探究学習を進める生徒、KEW 企画に参加する生徒に分かれた。これまでの自分の探究学習に躓いている生徒は特に興味を示している様子であった。</p>	<p>Chromebook</p> <p>Google スライド</p> <p>Google フォーム</p>
10月25日	<p>【オリエンテーション】</p> <p>外部講師である山下若菜先生・荒川美穂子先生に概要の説明を頂く。</p> <p>アイデアやイメージをみんなで共有する。</p>	<p>事前アンケートに答えてもらいその結果をもとに計画を立てた。回答ではどのようにしたいかが抽象的であり、紙に描き出してみると様々なアイデアが出ていた。その後グループ分けをし、考えを深め、全員の共通事項としておすすめ本を紹介することが決まった。今後</p>	<p>Chromebook</p> <p>Google フォーム</p> <p>外部講師2名</p>

		の活動に意欲的に取り組む態度がみられた。	
11月8日	【おすすめ本紹介作成】 図書館を利用し、スライドでおすすめ本の紹介を作成する。	おすすめ本紹介のスライドを作成した。本を読む機会が少ないという生徒が多く苦戦していた。誰におすすめしたいかターゲットを決めるとまとめが進んでいる様子だった。	Chromebook Google スライド
11月15日	【活動内容を考える】 過去の実践例や全国の図書館や本屋の取り組みを調べる。企画を考え、まとめる。	調べ学習後に、自分たちで行う企画について、実践可能か、必要なものは何かを考えた。グループで考えたことをまとめ、整理した。	Chromebook
11月22日	【フィールドワーク】 書店店長野田順治様に現時点での構想を発表する。 書店側よりご意見・アドバイスを頂く。	3グループの考えた企画を代表者が発表した。書店側より貴重なご意見を頂き、見直すべきところ、加えるべきところが分かった様子で、意欲が湧いていた。	Chromebook
12月6日	【1年生・本紹介作成】 児童から大人まで、おすすめする本についての紹介を仕上げる。	前回の続きで紹介スライドを完成させた。色や挿絵、文字の大きさなども工夫して仕上げを行っていた。また、制作物について必要なものを話し合い、積極的に発言していた。	Chromebook Google スライド
12月13日	【展示物制作】 必要なものを集め、制作を始める。	必要なものをそれぞれ準備し、制作を行った。外部講師・書店のアドバイスを取り入れ、熱心に取り組む様子であった。	Chromebook
12月20日	【展示物制作】 制作を進める	制作を進めた。制作開始が遅くなったため、指示をしっかりと行うべきであったと感じている。また、プレゼン発表も控えているため、放課後や家庭学習時間等を使って進めるように指示をした。	Chromebook
1月10日	【展示物制作】 最終制作	探究の時間での制作時間が最後であったため、集中して取り組んで	Chromebook



		いる様子であった。	
1月 17日	【2年生・分野別発表】 KEWの3分野合同でプレゼン発表を行う。	KEWの3分野合同でプレゼン発表を行った。プレゼンのまとめ方、発表の仕方について工夫していた。	Chromebook Google スライド
1月 18日	【最終確認】 実際の地下スペースと同じ広さを確保し、事前確認として展示・配置を行う。	書道教室、パネル、机を借りて、最終確認を行った。実際の展示した様子をイメージすることができた。連絡をしていたものの、人数が集まらず、時間が押してしまった。連絡手段を見直すべきだと感じた。	
1月 19日	【設営・展示】 放課後、書店地下スペースにて展示を行う。	事前に最終確認として、配置のイメージが出来ていたのでスムーズに展示を行うことができた。	
1月 29日	【撤収作業】 1年生3名と片付け作業を行う。	最後の片づけに書店に向かった。テスト期間中でもあったため、1年生のみ最後の撤収を行った。	

(9) 『第8回サステナブル・ブランド国際会議 2024 東京・丸の内』

ア 日時：令和6年2月21日（水）～22日（木）

イ 目的：自分たちが望む未来を実現するために、持続可能な取り組みにチャレンジする企業（団体）と共創し、社会課題・環境課題を解決するアイデアを企業に向けプレゼンテーションを行う。必由館高校は九州代表として参加し、総合的な探究の時間で学びを深めてきたサスティナブルツーリズムについての研究発表を行う。

ウ 参加校一覧

札幌日本大学高等学校 東北高等学校 成立学園高等学校  
文化学園大学杉並高等学校 中央大学杉並高等学校 中部大学第一高等学校  
福井県立若狭高等学校 雲雀丘学園高等学校 香里ヌヴェール学院高等学校  
修道高等学校 AICJ 高等学校 愛媛県立今治東中等教育学校  
東福岡高等学校 熊本市立必由館高等学校 計14校

エ 場所 東京丸の内 東京フォーラム

オ 概要

1日目は、ランチミーティングから参加しました。生徒同士の交流や福井シンポジウムの説明が中心に行われました。福井県は県内全体の高校で総合的な探究の時間に企業と連携して取り組んでいました。教育委員会が企業との橋渡し役をしており、探究学習の深まりがあると感じました。

2日目は、朝から成果発表の練習をしました。その後、各企業のブースを回り、日本旅行のブースでは、日本旅行の取り組みと3月末の福井シンポジウムで実践するTripaについての説明を聞きました。また、ESDが拓く社会の発表を聞き、小・中・高でのそれぞれの取り組み成果の発表を拝見しました。

#### カ 生徒の感想

##### (ア) 成果発表について

・発表中に表情が固くなりすぎないようにしようと心がけましたが、本番になると表情が固くなってしまったので改善点の一つだと思いました。また、原稿を覚えていたにもかかわらず、本番になると言葉が出ずに、本番に力を発揮することができないことを再確認しました。

・大勢の人前で緊張せず、堂々と発表することができました。東京へ行く前、「発表時間4分を4人で発表する。」頭ではそれが分かっているのに心が追いついておらず、発表するプレゼンを作る段階で「私が選ばれて良かったのか、本当にやり遂げられるのか」などと考えすぎて体調を崩してしまいました。しかし、スライドが無事に完成してプレゼン発表練習を重ねるうちに、考え込むことはなくなりました。この体験は、大事にしたいと思います。メンタル面でとても勉強になった期間でした。

##### (イ) 他校の成果発表について

・中部大学第一高等学校が名刺に自分たちの開発した香水をつけていて、内容がしっかり残る良いアイデアだと思いました。また、福井県立若狭高等学校は「less Two run」に動きをつけていてとても可愛いと思いました。そして、最優秀賞の香里ヌヴェール学院高等学校は、話し方、溜め方「実は私達！！...会社を経営しているんです！」がとてもいいなと思いました。

・他校の人には感情があったように感じました。全体的に言葉や体に動きがあり、聞き手を退屈させない話し方をしていた。また、自分たちのシナリオを覚えていて台本を見ずに話していました。セリフが抜ける場面もありましたがそれはそれで人間味があって良かったと思いました。自分に自信を持って発表している人がとても輝いていて、印象的でした。私も人をひきつけるような話し方をしたいと強く思いました。

・私たちの発表と大きく違ったのは、表現力と発想力です。発表中に身振りや手振り、声の抑揚、英語を喋るなど伝えたいことがまっすぐに伝わってきました。また、私たちは観光に縛られたということもあるかもしれませんが、自分の地域の匂いを再現したり、企業と連携して商品を作り販売したりと着目している点が面白いと思ったし、行動力も桁外れで大きく差を感じました。

##### (ウ) 参加企業のブースについて

・実際に商品を手にとって触り、五感で体験できたのがとても良かったです。SDGsの視点を取り入れながら商品開発をしていて、商品としても画期的なものが多く、自然にも優しいと思いました。

・ Econykol は、ヒマの実から得られる油をベースとしたポリウレタン用ポリオールです。カーボンニュートラルへの貢献、高品質・安定した供給体制、ヒマ農家の支援を通じた SDGs 達成への貢献、バイオマスプラマークを取得可能などサステナブルな未来に向けて新たな価値を創造していました。その Econykol で作られた化粧用パフがとてももちもちで感動しました。

・ 一番印象に残っているのは、植物（雑草）の種から油を抽出し、その油で人の体温で変形するプラスチックを作り、それを使って化粧品のパフや下着などの衣服を作ったりしている企業です。実際の触り心地ももちもちしていて気持ちが良いもので、もし捨てたとしても二酸化炭素の排出量がプラマイゼロなので本当に環境に配慮されていて発想が面白いなと思いました。

(エ) 全体を通して、

・ 成果発表のことがとても印象に残りました。私は、昨年もサステナブル・ブランド国際会議に参加し、成果発表も見学しました。今回の発表では、昨年よりもっと自分が感じた熊本の魅力を活かせるスライドや動画を作りたいと思い、取り組みました。しかし、実際に自分たちが発表へ向けて取り組むと、想像していた形の出来栄ではありませんでした。当日は、みんな緊張せずに落ち着いて発表できたのは良かったと思いましたが、他校の生徒の発表を聞くと自分たちの足りてないところが見えてきました。全体的に改善の余地があったと感じました。1日目のウェルカムミーティングの時に全国から集まった高校生と交流をして、方言が少し違ったり自分の意見を突き通すタイプの人だったりいろいろな人がいることに圧倒されました。しかし、この会議に参加していなかったら出会えていなかったので参加して本当に良かったと思います。この縁を3月末の福井シンポジウムでも深めたいと思います。

・ 「福井シンポジウム」についての説明が印象に残りました。福井県は教育委員会が、「引き出す教育 楽しむ教育」「探究学習の推進」をしていて探究的な学びを支援していました。そして探究学習では、予測できない未来をより良く生きるための力と自分事としての課題発見能力が身につく内容になっていました。福井県の高中生は、探究学習をしていく中で『学び方が「探究的な」学びに変わった』そうです。そして修学旅行を地域と生徒が一体となり、地域の方々と一緒に創り上げることで地域の活性化に繋がりが、循環型社会を目指せるということが勉強になりました。全体的には、他校の生徒とのグループディスカッションの時に、自分の住んでいる県のことを互いに説明し、実際にその県に行ってみたくなりました。改めて全国から集まっているのだと実感し、もっと交流を深めたいと思いました。交流の時間はあっという間に終わり、とても楽しい時間を過ごしました。3月末の福井シンポジウムでも更に交流を深めたいと思います。

・ 使わなくなった着物を洋服などにリメイクしている学生の発表が印象に残りました。私自身、服飾デザインコースで和服・洋服を作っているのでリメイクで作ってみるのも面白いなと思いました。他にも、私は自分には思いつかなかった視点などを多くの人と交流したり聞いたりすることで学ぶことができ、少しでも自分の身にできたような気が

しました。全体を通して、私が交流した他校の人は、コミュニケーション能力が高いなと感じました。話し合いのときに先陣を切ってみんなをまとめようとしてくれる人や、人の目を見て話す人、聞く人などがいました。多くの人と交流して、これから私もコミュニケーションを積極的に取れるようになりたいと思いました。

### 3 外部有識者による講演・講義

(1) 東北福祉大学 教授 長田 徹 氏

ア 日時：令和5年5月1日（月）13:30～15:00

イ 演題：『人はなぜ学ぶのか。なぜ働くのか。～自走しよう必由館！～』

対象：生徒、保護者

ウ 概要

○2、3人でチーム シミュレーション体験

A（中学2年生）

「勉強ってなんのためにするの？」 B高校生の兄、C姉として何と答える？

○国際的な学力調査

世界順位 中学校 数学 1999年3位→最新の結果4位

理科 1999年3位→最新の結果3位

基礎学力は高いが、数学・理科を実生活につながらないと感じている。

○高校を卒業した大人にアンケート

Q「光と音どちらが早い」Q「地球が周りを周っているのか、その逆か」

日本の大人の正答率 世界13位 ⇒身に付けてきた知識が剥落している

○人口推移

2010年ピーク 今後急激に減少

○AIと取って代わられる職業

○東日本大震災で被災 一瞬にして、世界が変わった

スライド紹介

高校生カフェ 高校生のアイデア

かぎかっこ「」プロジェクト

一人では絶対にできない、誰かと協力すればすぐにできる。

○これからの高校生活の中で、自分が学び、自分のよさや可能性も認識して欲しい。

君たちには伸びしろがある。

エ 生徒謝辞

本日はお忙しい中、「なぜ学ぶ必要があるのか」についてご講話いただきありがとうございます。私は、学ぶことは、将来につながることに、漠然としか考えていませんでした。でも、もっと深い意味があって、そこには自分のためだけではなくて、人のためや、互いに助け合うために学ぶことが必要だということを改めて深く考えさせていただきました。短い高校3年間ではありますがこれからしっかりと学び、人と世界、社会を繋げていけるようになりたいと思います。

(2) 東北福祉大学 教授 長田 徹 氏

ア 日時：令和5年5月1日（月）15:30～17:00

イ 演題：『キャリア教育の一層の充実に向けて』

対象：教職員

ウ 概要

○学習指導要領に始めて前文が創られた

概要

- ・一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識できるように
- ・生徒が学ぶことの意義を実感できるよう
- ・義務教育の基礎の上に、高等学校卒業以降の教育や職業、生涯にわたる学習とのつながりを見通せるよう 高等学校学習指導要領を定める

○中学、高校の実際にあった事例をもとに3人組（生徒役、教師役、聞き役）で言葉かけのシミュレーション

○高校生が実感できるようにしてあげる必要性がなぜあるのか

- ・日本の高校生300人強が自ら命を絶っている。
- ・自己肯定感低い 社会参画意識低い

○HR 活動の意義

- ・「なぜ働くのか なぜ学ぶのか」を問う。
- ・教師の仕掛けにより自己変容実感を喚起させる。

○今学校でやって入りことは無駄にならない 意義がある

- ・学習したことを見直し振り返る活動をキャリア教育の場面でおこなう。

○高校は

「中学校まで頑張ってきたことをさらに伸ばすところ。

中学校より頑張り切れなかったことを新たに伸ばすところ」

エ 職員謝辞

胸がいっぱいになりました。3人組でシミュレーションした後に事例を聴くととても、心にしみるものがありました。色々な感性に訴える言葉があるのだなと思いました。

日々探究的な学習のあり方を検討していく中で、いろんなことに悩んでいます。今後子供たちがどうキャリアを積み重ねていくかということを考えたときに、大学入試（総合型選抜）のために探究をさせるのかとか。やっぱり学力も必要ではないか。総合的な探究の時間で、いろんな経験を積み重ねながら、教科の授業もしっかり両輪でやって、2つの力をしっかり身に付けさせなければならないのではないかと。また、探究ということが、本当に自分の将来のキャリアにつながるいけないのか。まだ自分自身を知らない高校生にとっては、それが本当につながるかならないとなってしまうことは、いろんな可能性を摘んでしまうのではないかという気持ちもあります。この中で、どのように探究活動を、先生がおっしゃられたに、外部と接していくことだけが最善の方法ではないと思うので、目的と方法をどのように積み重ねていくかということを、これからも私たちは話し合いを進めながらやっていきたいと思っています。

その中でこれまで足りなかった視点として、ホームルーム活動の内容です。どうしても教科のこと、探究のことばかりを考えていて、ホームルーム活動を充実させることが、生徒の動機付けを促し、自己成長を実感させる大切な場であるということに気付かされました。

自分だけでできることは少ないので周りの先生方と協力をしてやっていくということが、今必要とされているのだなということを感じたところです。

私は中学校から異動してまいりました。高校に来て5年目になりました。市立高校は2校しかありませんので他の高校の事例を聞くことがありません。今日は先生のお話の中でたくさんの事例を紹介いただいて、こんな高校をあるのだな、これからの教育実践に向けてタネをたくさんいただいたような気がしています。

(3) 熊本大学大学院教育学部 特任教授 前田 康裕 氏

《第1回》 日時：令和5年5月23日（火）15：30～17：30

演題：『生徒が主体的に学ぶ学校づくり』

《第2回》 日時：令和5年7月11日（火）15：00～17：00

演題：『生徒が主体的に学ぶ学校づくり ～対話的な学びを目指して～』

《第3回》 日時：令和5年11月7日（火）15：30～17：00

演題：『授業改善 ～リフレクションタイムの活用～』

《第4回》 日時：令和6年2月15日（木）15：30～17：00

演題：『「生徒が主体的に学ぶ授業づくりと「概念化」  
～主体的・対話的な学びを目指して～』



必由館高校 研修評価アンケートの集計結果まとめ

前田康裕（熊本大学）・前田菜摘（大分大学）

## 1. 調査概要と回答者の属性

実施期間：2月15日（木）～2月27日（火）

回答人数：51名

### 【回答者の属性】

#### 役職：

教諭・主幹教諭・指導教諭 39名／講師（非常勤含む）10名／その他（養護教諭など）2名

#### 教職経験：

1～3年目 6名／4～10年目 13名／11～20年目 11名／21年～30年目 13名／31年目以上 8名

#### 担当教科：

受験5教科（国語・社会・数学・理科・英語）32名

実技系教科（保体・美術・音楽・書道・情報・家庭）15名

該当なし・無回答 4名

#### 他校種での勤務経験：

勤務経験あり 20名／勤務経験なし 28名／無回答・意図不明 3名

（中学校・中等学校 15名／特別支援学校 4名／小学校・幼稚園 3名）

**過去に研究授業を行う授業研究会に参加した経験の有無：**

参加した経験があり、授業者としての参加経験もある 34 名  
 参加した経験があるが、授業者としての参加経験はない 13 名  
 参加したことがない 4 名

**過去に研究授業を行う授業研究会に参加した場所：**

勤務校（高等学校）30 名／勤務校（高等学校以外）20 名／  
 学校以外のコミュニティ（行政含む）での授業研究会 19 名

**2. 年間全体の校内研修に対する評価**

**(1)総合的な満足度**

「今年度の校内研修の総合的な満足度を教えてください」に対する回答は、「非常に満足」14 件（27.5%）、「満足」31 件（60.8%）、「やや満足」6 件（11.8%）で、「やや不満」「不満」「非常に不満」の回答は 0 件であった。

なお、教職経験による回答の差は見られず、幅広い教職員にとって満足度の高い研修であったことがうかがえる。

「やや満足」と回答した理由には、「時間の設定を、毎回放課後は辛い」「ためになったことが回数に対して多いとは言えない」といった声があり、限られた時間や回数の中で、より研修効果を高めていくことが課題になると考えられる。

今年度の校内研修の総合的な満足度を教えてください。

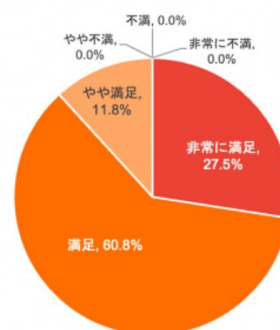


図 1 今年度の研修の満足度（全体）

**(2)各回の研修に対する評価**

各研修に対する評価は図 2 の通り。いずれの研修も 9 割以上の教職員が肯定的に評価している。特に「授業改善／アップデート研修（年間）」は 6 割以上の教職員が「非常に有意義だった」と回答しており、相対的に見て評価が最も高い。

なお、「非常に有意義だった」を 4 点～「有意義ではなかった」を 1 点として平均得点を算出した場合、教職経験や担当教科（受験 5 教科／実技系教科）による有意な差は見られなかった。いずれの研修も、幅広い教職員にとって意義ある内容であったことがうかがえる。

以下のそれぞれの研修はどの程度有意義でしたか（数字は回答件数）

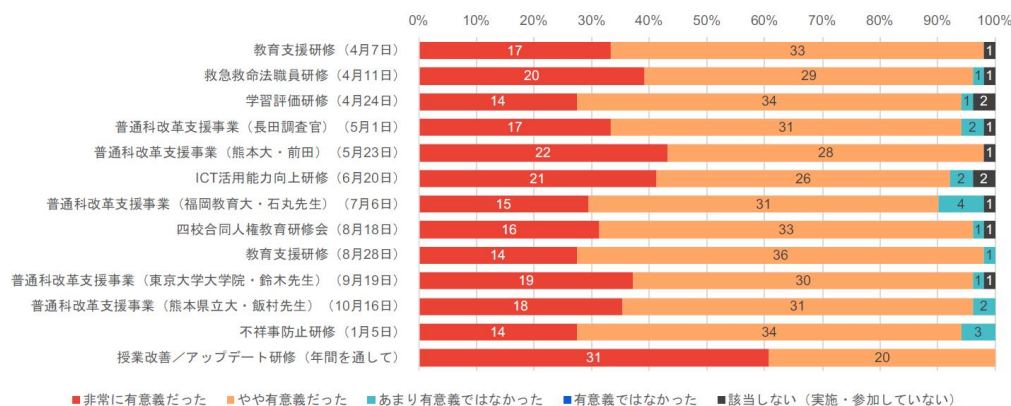


図 2 各回の研修に対する評価



### 3. 授業改善／アップデート研修に対する評価

#### (1) 授業改善／アップデート研修への参加

授業改善／アップデート研修への参加は、「全て参加した」35件（68.6%）、「参加していない回もあるが、おおむね参加した」15件（29.4%）、「ほとんど参加していない」1件（2.0%）、「参加していない」0件であった。回答者のうち、7割近い教職員が全ての回に参加している。

#### (2) 授業改善に関する校内研修の総合的な満足度

授業改善に関する校内研修の総合的な満足度は、図3に示す通り。

9割近い教職員が「非常に満足」「満足」を選択しており、満足度の高い研修だったことがうかがえる。なお、教職経験や担当教科による差は見られなかった。

回答の理由（自由記述）では、「実践改善やリフレクションの契機となったこと」や「実際に実践に変化があったこと」など、自分自身の学びが実感できたことに対する記述が多く挙げられた。また、「他の教職員の取り組みを知ることができた」という回答も複数見られた。

自由記述からは否定的な意見はほとんど見られず、「スケジュールがタイトで、もう少しじっくり話を聴いたり話し合いをもちたかった」という、より時間をかけて取り組まかったという意見が1件あった。

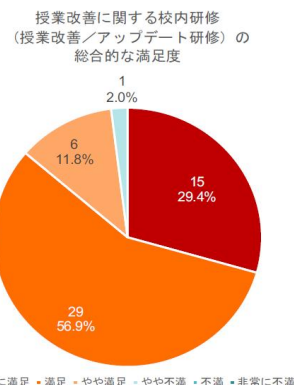


図3 授業改善に関する研修の総合満足度

#### (3) 教科を越えた授業研究会の満足度

教科を越えた授業研究会に対する満足度は、図4に示す通り。4割近い教職員が「非常に満足」を選択している。自由記述からは、「他教科の実践から参考になるものがあつたこと」「他教科の取り組みや実践への理解が深まったこと」「他教科の教員の意見が参考になったこと」など、他教科の教員との交流が自身の学びに有効だったことについての記述が多く挙げられた。否定的な記述では、「専門性の点での浅さ」についての言及が1件あつたほか、「他教科の実践を見る機会がなかった」という意見も1件見られた。

教職経験により満足度に差は見られなかったが、受験5教科を担当する教職員（32名）よりも実技系教科（15名）を担当する教職員のほうが「非常に満足」を選択する割合が多かった\*（図5）。その理由の記述からこの差を説明づける特徴は見出せなかったものの、実技系教科は同じ教科を担当する教職員が校内に少ないことや、教科に焦点を当てた研究会では受験教科に関心が集まりやすいことなどから、受験5教科を担当する教職員よりも実技系教科を担当する教職員のほうが、教科横断的な視点に対するニーズが高かったのではないだろうか。

\*「非常に満足」を6点として得点化しt検定を行った結果、5%水準で有意な差が見られた（ $t(37.126) = 2.66, p = .011, \text{Cohenの } d = .811$ ）。

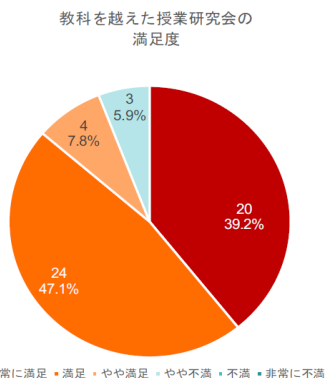


図4 教科を越えた授業研究会の満足度

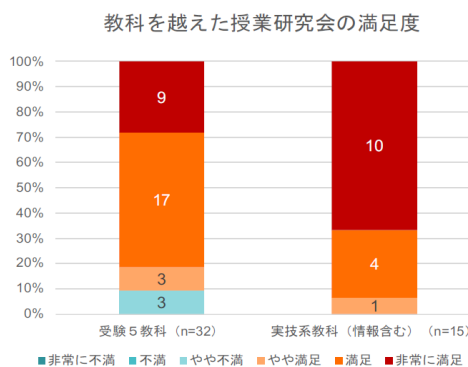


図5 教科を越えた授業研究会の満足度 (担当教科別の集計)



#### (4)校内研修を経ての実践の変化

「授業改善に関する校内研修を経て、ご自身の実践（授業や教材研究）に何か変化はありましたか」に対する回答は、図6に示す通り。

「とても変わった」6件（11.8%）、「変わった」34件（66.7%）、「どちらとも言えない」11件（21.6%）、「変わらない」0件（0.0%）であった。7割以上の教職員が自身の実践の変化を実感していることがわかる。

なお、教職経験や担当教科による回答の差は見られず、若手から経験教師まで幅広い教職員が実践改善に取り組み、その変化を実感できたと考えられる。

自由記述からは、「具体的に授業にもたらされた変化」に関する言及だけでなく、「視点をもって意識的に授業改善に臨めたこと」や「授業改善に対する意欲の向上」についても挙げられた。また、「どちらとも言えない」と回答した教職員の自由記述からは、「多忙により授業改善に臨めなかった」「実践にまで至らなかった」といった意見が挙げられた。

授業改善に関する校内研修を経て、ご自身の実践に何か変化はありましたか

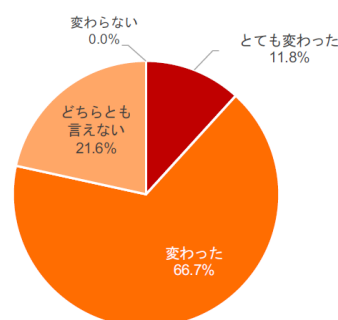


図6 研修を経ての実践の変化

#### (5)授業改善に関する校内研修により得られた成果

授業改善に関する校内研修を経て深められた点については、図7に示す通り。「主体的・対話的で深い学び」に関する理解は、肯定的回答（深まった・やや深まった）が100%を占めた。また、「同僚との関係性」は、「深まった」の割合が最も高く、多くの教職員が同僚との関係性の深まりを実感していることがわかる。また、「ICTの授業での活用に関する知識」や「生徒理解」についても、9割を超える教職員が肯定的に回答しており、研修を通じてICT活用といった教材に関する知識や生徒の学びに関する理解を深めていったことがわかる。

設定した項目のうち肯定的な回答の割合が低かったのは、「教科内容や教材に関する知識」や「教育課程・カリキュラムに対する理解」であった。これらの知識や理解は今回の研修デザインにおいて意図的に目指されておらず、相対的に評価が低くなることは容易に想定できる。反面、そうした点にあっても8割以上の教職員が肯定的に評価しているということは、課題解決に向かう過程で教科やカリキュラムに関する知見を深められた教職員が多くいたということの意味するのではないだろうか。

以下の点について、授業改善に関する校内研修を経てどの程度深まりましたか

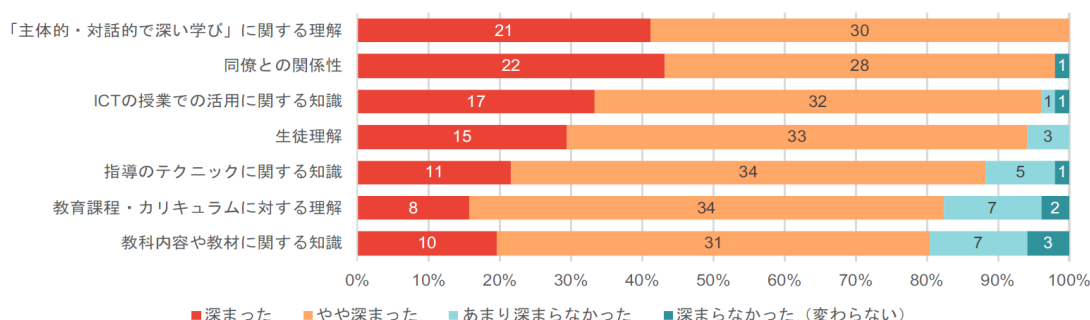


図7 校内研修を経て深められた点

#### (6)有意義だった活動について

研修の活動別の意義の評価は図8に示す通り。いずれの活動に対しても9割以上の教職員が「非常に有意義だった」「やや有意義だった」と回答している。中でも「講師の話聞く」「同僚の研究授業を見る」に対する評価が最も高く、また、「タブレットで意見を共有する」よりも、その後に行う「対話」や「概念化」「振り返り」に対する評価が高い。「講師の話」についてはどのような意義があったかにつ

いて検討が必要ではあるが、同僚との共同・対話、また、概念化を通じた省察の機会が特に有効であったことがうかがえる。

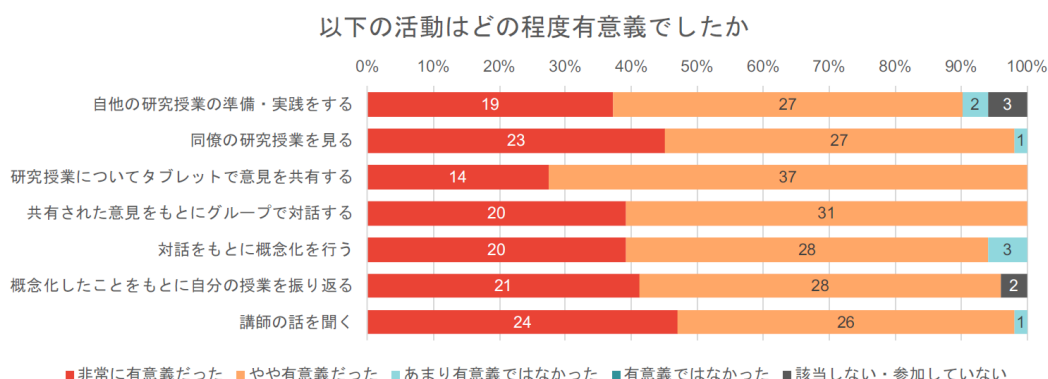


図8 研修における活動に対する評価

(4) Y'sReading 代表取締役 熊本大学医学部 教授 中山 善晴 氏

ア 日時：令和5年6月9日（金）14：35～16：30

イ 演題：『「自己表現としてのプレゼンテーション20×20」

～ペチャクチャナイトを使ってプレゼンテーション能力を身に付けよう～

対象：生徒

ウ 講演概要

○プレゼンテーションについて勉強したという人はいないのではないかと。きちんと勉強しないと身につかない。

○ペチャクチャナイト→20枚のスライド×20秒の合計400秒でプレゼンする。

自分の思っていることを相手に伝えるための技法⇒人生が豊かになる。



- ①誰が？（わたし、私たち、会社、仲間）
- ②いつ？（入試、就職、恋愛、結婚、日常の様々なシーン）
- ③どこで？（対面、オンライン、グローバル）
- ④なぜ？（自分自身、夢、希望、意味、〇〇を伝えること）
- ⑤どうやって？（パワポ、紙、ムービー、ペチャクチャスタイル（20×20）で）

○ペチャクチャスタイル

・ルール 1スライド 20秒×20枚

文字は最低限、アニメーションも最低限 伝えたいことを明確に。

楽しむことが大切

・ ツール：ポストイットカード

①タイトル、②氏名、③夢の紹介、④きっかけ、⑤エピソード1、⑥エピソード2、⑦私これがしたい、⑧挫折1、⑨挫折2、・・・⑩

○中山氏の実演後、生徒全員で実際に体験活動

・ 20枚×10秒で実施。

○このようなプレゼンテーション能力を身に付けることで、より充実した高校生活が送れる。

○プレゼンのコツは？

→まずは「慣れ」。場数を踏むことでオーディエンスとの一体感が出てくる。最初は難しいが、一体感を目指すといよい。



(5) 福岡教育大学 副学長 教育学部教授 石丸 哲史 氏

ア 日時：令和5年7月6日（木）15：00～18：30

イ 演題：『必由館高校改革に向けたESDの役割』

対象：教職員

ウ 講演概要

○ESDの背景

・ ESDとは社会的、課題を解決するための教育。

ソーシャルビジネスとは社会的課題を解決するためのビジネス。

ウェルビーイングはESDが目指す一つの方向性である。

ESDは我が国が提唱した持続可能なための教育。

2019年ユネスコの総会で、「持続可能な未来を形づくる上で必要な知識や技能や態度や価値観を養う」SDGs目標達成のための教育でもあると定義している。

○ESDで重視する観点

・ 持続不可能な状況を理解し持続可能な開発に係る課題を教育や学習に導入する。

(社会課題に必要なそれぞれのコンテンツ：気候変動や、防災や減災、生物多様性、貧困の撲滅、持続可能な商品など)

・ 批判的な思考、将来像を描く態度、協働による意思決に必要な資質・能力を育む。

(資質・能力、コンピテンシー)

・ 「持続可能な社会づくりのための人づくり」がESDであり教育がこれを担う。

・ バックカスティング的なものの見方が重要になる。

持続可能な社会に向かうためには、まずは今がどういう状況なのか、持続不可能な現状をまずしっかりと認識し、問題意識をもって、どうすればいいのかという課題に向かっていく。

- ・問題の認識と、課題の設定は課題解決学習の中でも重要である。
- ・問題：持続不可能な現状認識して問題意識を持つこと  
課題：どうすればこの問題を解決することができるのかというタスク。

#### ○ゴールの設定

- ・SDGsで持続可能な開発目標（ゴール）をはっきりさせた。
- ・同じゴールに向かっていける人づくりをどうしていくかというところにESDの意味がある。

#### ○国立教育政策研究所「ESDのフレームワーク」

- ・持続可能な社会づくりに関わる課題を見出すため視点  
Ⅰ多様性 Ⅱ相互性 Ⅲ有限性 Ⅳ公平性 Ⅴ連携性 Ⅵ責任性  
「持続可能な社会ってどんな社会なのか」ということを、六つの構成概念から社会像を、一人一人の生徒が言えるようになることは大変重要である

#### ○ゴールへの向かい方

- ・並走型 ・バトンタッチ型 ・コレクティブインパクト

#### ○エデュケーション2030が目指す三つの力

- ・新たな価値を創造する力 ・責任ある行動をとる力 ・対立やジレンマに対処する力

#### ○エージェンシーについて

- ・エージェンシー：変化を起こすために、自分で目標を設定し振り返り、責任を持って行動する能力である。
- ・エージェンシーが「新しい価値を創造し、責任ある行動をとり、対立やジレンマに対処する力」の原動力となる。

#### ○生徒を「ガチ」にさせる（生徒のエージェンシーを育む）

- ・生徒が「ガチ」になりさえすれば、色々なパワーが発生してくる。
- ・「ガチ」にさせるための手段の一つがESDの実践である。
- ・生徒を「ガチ」にさせるために、具体的な事例、事情や場面や、持続不可能な場面を取り上げ、示すことも重要である。
- ・生徒をガチにさせる重要な主体は教師・同級生・保護者・コミュニティー。
- ・エージェンシーのもと「見通し行動を振り返り、まず見通しを持って行動して、行動した後に必ず振り返る」というサイクルでウェルビーイングに向かっていく生徒を育成すること重要。

#### ○日本財団「18歳の意識調査」

- ・「自分も大人と思う」「自分は責任ある社会の一員だと思う」「将来の夢を持っている」「自分で国や社会を変えられると思う」「自分の国に、解決したい社会課題がある」「社会課題について家族や友人など周りの人と積極的に議論している」全て意識の割合が低い。つまり、ガチになれてない

#### ○ESDとキャリア教育

- ・ESDが全部キャリア教育を引き受けるのではなく、キャリア発達の処方箋の一つ

○体験を体感で終わらせない

- ・ 成功も失敗も
- ・ 体験が体験で終わらないためには、目標が重要である。

○生徒をガチにさせる大人のかかわり方「0から8段階」

- ・ 0段階では、全然若者が関与していない。  
少しずつ若者の登場機会あるいは参画機会というものがオープンになっていく。
- ・ 5段階ぐらいから大人がプロジェクトを主導し意思決定を行うのではなく、  
若者も参画してくる。
- ・ 8段階では若者が主導し大人とともに意思決定を共有する。

○最後に

- ・ 持続不可能性に気づくか気づかないか。持続不可能な状況見て問題と思と思うか思わないか。どうすればその問題を解決できると考えるか、考えないか。課題解決する方法を思いつくか思いつかないか。課題解決に向けてやるかやらないか。
- ・ 生徒自身に、しっかりと認識をさせる、教師もそれを見とることが重要。

#### (6) 東京大学 教授 鈴木 寛 氏

ア 日時：令和5年9月19日（火）13：30～14：30

イ 演題：『大学が変わる 社会が変わる 今、君たちにできること』

対象：生徒

ウ 印象に残った言葉や内容

- ・ 失敗したり悔しい思いをしたときが一番成長できる
- ・ 高校のときになにか一つはまれるものを持っておくべき
- ・ 0と1の差は大きい
- ・ AI が人間の仕事を奪っていく未来がいずれは来るけれど、AI を使いこなす、できないことを担うなど人間にしかできないことを探して動く力が大切だと思いました。社会科を勉強する意味がわかった気がします。印象に残った単語は吉田松陰です。私は吉田松陰の「諸君、狂いたまえ」という固定観念に縛られるなという言葉が好きなのですが、より一層自分の考えを大切にしようと思いました。



・ stem に a(芸術)を加えたという話が印象に残った。

- ・ Student agency (能動的責任主体)
- ・ well being 幸せの再定義
- ・ 内発的動機づけ
- ・ 芸術はこれから重要なもの
- ・ アーティストと職人は一見同じような仕事に見えるが、アートはテーマ、材料、表現方法のすべてが自由で、職人は決められたものを決められたテーマで作るということを知って全然違うと思った。

- ・ すぐかんゼミ
- ・ 井上毅
- ・ ハマっていることを極めたり、見つけたりすることで人生の選択肢が広がる
- ・ やりたいことに打ち込むことが大事だということと教育を変えることによってみんなが受けられることができることがわかりました。実際に大学受験の内容や奨学金なども新しく改革されていてすごいなと思いました。全然知らないことがあって自分のためになるお話ばかりで聞けてよかったなと思いました。
- ・ 悔しいと思った出来事があったとき、どうしてそうなったのか原因を探る。そしてそこからどうやって立ち上がっていくか考えることが大切だということ
- ・ 強い決意を持った、市民の小さなグループが世界を変えられる
- ・ 自分の人生は自分でデザインしていく
- ・ 真の幸せとはなにかという問い。若い世代や私達は目先の快樂や楽しみを求めすぎているのではないかなと思った。自分が真の幸せとはと聞かれても答えることができないだろうなというもどかしさを感じた。
- ・ 脱近代ではなく、卒近代

## エ 生徒の感想

- ・ 人生いろんなことにチャレンジしてみることが大事だなと感じました。私は個人的に興味は多いほうだと思うので、もっとどっぷりハマりたいなと思ったし、もっと大切にしようと思います。高校生だからこそ自分の好きなことに打ち込めるのかなと思ったので、視野を広げているいろんな興味関心ごとを見つけないかなと思いました。高校生で行ったことがその後の人生に大きく影響するかもしれないのだなと知りました。今はAIなどの人工知能、ロボットがたくさんあって、人間がこれまでしていたことを代行していくので、人間にしかできない想像する力を、高校生の時から身につけていきたいです。
- ・ これまでのようにマニュアルどおりに仕事などをこなしては、今の時代はAIがマニュアルどおりにそれをこなすのが早く、うまいため、人間はAIのできないことを狙ってしていくことが大事であるとわかった。そのために残念な苦い経験から「見通し、行動、振り返る力」をもって、wellbeingにしていきたい。そして、「芸術（音楽）、操短」を大事にして自ら何事も進んで取り組むようにしていきたい。
- ・ 自分の進路が今のところ全く決められていなくて、私は音楽とゲームが好きでまた韓国語の資格を持っているのでそれを繋げたことを将来的にできたらなと思っていただけ言い出せないし行動に移せていないことが凄くもったいなく感じました。今回のことを通じてもっともっと自分のことを知って何をしたいのか、そのためには今どんなことをしたらいいのかなどを考えてあとの一年半くらいを過ごしたいと思います。
- ・ 私は将来、栄養教諭になりたいと考えています。今回のお話であったように給食の献立作成や調理といった仕事をAIに取られるといった話を聞いたことがあり、私はそれに納得していました。しかし、今回の講話を通して、好きな食や栄養について学ぶことを楽しみ、急激に変わっていく社会に適応するため人間の特権である創造力を人生を通して養いたいと思いました。
- ・ あまり積極的に物事にチャレンジしたり、挑戦したりするタイプではありませんでした。いつも失敗してしまったら…と考えてしまい嫌な気持ちになるからです。今日の講話の中で自分が気になること、少しでも興味を持ったことにはチャレンジしてみよう



おっしゃられていてハッとしました。気になることがあったらこれからはチャレンジしてみようと思いました。

・Artは言語が伝わらなくても気持ちが伝わるし、一番人によって感じ方が変わる個性が出るものだから改めて大事だと思いました。難しい話についていくのが大変だったけど自分の知っている有名人が「すずかんゼミ」出身だとすごいなおもいました。学生で聞いたときと社会人になったときの捉え方も違うと思うのでまた社会人になったときに聞きたいです。

・私は、元々将来システムエンジニアとして、「他人の幸せのため」だけに働き、生きていくように考えていました。しかし、今回のお話を伺って、「他人の幸せのため」だけでなく「自分の幸せのため」にも生きていこうと考えました。これは、「自己満足」だけでも「他己満足」だけでもない「新しい幸せ」をつくるために生きていくということです。

・私は将来事務関係の仕事につきたいと思っているけれど、事務は主にコンピューターを使うしごとだから人がいなくてもできる仕事ですごく悩んでいました。今は、機械にはない創造が大事だとおっしゃっていたので、事務関係につきたいという気持ちは変えず、コンピューターに負けない私だけができることを考えて行動していきたいです。

・私は現在、段々と世間が変わっていくと自覚しながらも私自身どのように適応していけば良いのかわかりませんでした。ですが鈴木さんの話を聞き私自身の気持ちがまだ言語化できませんが変わったように感じます。今まで将来のことを考えることから逃げていましたが、これからは向き合っていきたいと感じるようになりました。

・私は将来の夢はありますが、どんな生き方をしていきたいと明確なものは考えてきませんでした。ですが今後どんな問題に直面しても、自分で解決して、自分で決めた生き方をし、人生を後悔のないように、自分の思い描いたこと好きなことを次に繋げられるような生き方をしていきたいと思いました。

・私は井上毅さんという方を中学の時に習ったことがあって、鈴木さんはとてもリスククトされていて、気になったので調べてみようと思いました。また、高校のときに打ち込めるものを作っておいた方がいいとおっしゃられていたのでたくさんを積極的に経験していこうと思いました。

・AIにできないことは創造性、発想の自由だけだと思っていて、その力が活かすことのできる仕事は限られているのではと思っていた。でも今回、創造性、発想の自由以外にも責任主体や対立・矛盾の対応などを新たに知ることができ、考えの幅がとても広がった気がしました。

・やりたいことと向いていることのどちらを優先するか、そもそも将来何をしたいのかでとても悩んでいるので、「面白いことをどんどんやる」ということを教えられた今回の講義は参考になったと思います。じっくり自分と向き合って探していきたいです。

・近代化の波に乗るのではなく、卒近代化をする必要があるとわかりました。今まではAIに仕事が奪われるなど悪い考え方をしていたけれどそうではなく、AIに任せられる所を任せるという考え方をして進路についても考えていきたいと思いました。

・AIが進化してきている中で、人間ができることは限られてきていると思っていたけれど、新しく創造していき、アクシデントなどに対応できる、責任を取れるのはAIにはできないことだとしれたので、そういった力を身に着けていきたい。

・将来たくさんしてみたいことがあっても仕事に就くにあたって一つのことに集中しないといけないと思っていましたが、様々なことに興味を持ち、人とのつながりを大切に  
して自分の面白いと思ったことに取り組んでいきたいなと思いました。

(7) 東京大学 教授 鈴木 寛 氏

ア 日時：令和5年9月19日（火）15：20～16：50

イ 演題：『新生必由館高等学校に期待する教育の未来』

対象：教職員

ウ 講演概要

- 高校2年生から文系理系に分かれている日本の状況は特殊  
アメリカでは 文理融合、リベラルアーツが進む
- 15歳 PISA 調査では数学と理科は日本トップクラス  
しかし、高校2年生で文系を選ぶと数学をしなくなるのはもったいない  
AI 時代数学的知識技能は重要 文系だとしても学び続けてもらうのが重要  
文系大学でも数学必修になってきている
- 令和5年6月 新教育振興基本計画（令和5年～9年）閣議決定  
ウェルビーイングの向上が強調された
- 日本初・日本社会に根差したウェルビーイングの向上  
協調型（日本型）ウェルビーイング 日本やアジアはバランス&ハーモニー  
子どものウェルビーイングを達成するには教師のウェルビーイングが重要⇒働き方改革
- 日本の課題（割合が低い）  
自己有用感  
人生に意義や目的を感じている子供  
人生に満足をしていると感じる子供
- なぜ変えなきゃいけないのか 今までの教育がまずかったのではない。  
世の中が急激に変化している（AI ロボット 地球温暖化）  
150年ぶりに世界史の大転換期 過去を否定しているわけではない  
工業社会型人材は置き換わっていく  
⇒多様性重視の方向性
- 企業が求める資材  
「主体性・チームワーク・リーダーシップ・協調性・学び続ける力・課題設定・解決  
能力・論理的思考力・創造力」
- 大学進学率  
台湾 約90% 理工系 12万人  
韓国 約70% 理工系 10万人  
米国 約70% 理工系 43万人  
日本 約50% 理工系 10万人  
⇒これが数年、十数年と続いた結果、ICT分野に溝
- 意識格差  
第1階層 経済的・地理的状况によって生まれる劣等感や諦めの格差  
第2階層 より広い世界で自己実現を図ろうとする意欲の格差  
⇒教師以外の環境資源との出会いが重要



- Wellbeing を強調せざるを得なくなった背景
  - どこにも居場所がない 5% 誰にも相談できない 20%
  - 18 歳意識調査 軒並み 6/6 位
  - 社会に出てからは学んでいない人の割合 ダントツ高い
  - 中高生のメンタルヘルスは大きな課題
- 探究と STEAM のモデル
- どんな高校生がその後伸びるのか
  - 高校 2 年生から大学 1 年時にかけてコンピテンシーは大きく伸びない。
  - 授業外学習をおこない、キャリア意識が高く、対人関係、自尊感情が良好なタイプ（多くは部活動も行っている）は、大学 1 年時の学びと成長）
  - ⇒バランスの取れた学校教育が必要
- 「認知特性に応じた」個別最適化
  - 20 世紀の教育は「視覚優位」だった。「画像認識、音声認識」などに不親切。
  - ⇒DX、ICT 化は、子どもの認知特性に寄り添っていくための手段
- 生成 AI
  - 20 世紀型の学習を続けることは、将来の失業者を量産することと同じ
  - 過去に文字化デジタル化されたものは、AI で対応可。
  - 文字化デジタル化されていないものは、AI 不可。⇒非言語情報 感動 味覚 触覚 芸術・生活・デザインコースは強み
- いい「問い」を発する力を磨く
- 新しい職業を創れるか 対人関係 芸術 歴史学 考古学 倫理 等
- Agency、Well-Being を再定義し、新たな価値観に基づく新たな社会の創造 想定外と板挟み
- これからの学び
  - Social emotional skill 社会的情動的スキルを身に付ける。
  - この人と一緒に働きたいと声をかけ、声を掛けられる若者になる
  - 信頼・頼りがい
  - チームの中で活躍できる
- 内発的動機付け
  - 実践から始めてみる 基礎の大切さを知る
  - 探究から学習のループを始める
- 探究はテーマ設定が肝
  - テーマは好きなこと 見つからなければ「旅をする」
- 公正な個別最適化
  - 助けを必要としている生徒に必要としているときに手厚く
  - 学習集団の最適化
- 必由館へ期待
  - 意欲・内発的動機・Agency 九州一、日本一になって欲しい
  - 一人一人が自分の真骨頂を見つけそれを磨く最良の場
  - エポックメイキングできる若者
  - セルフモチベートできる
- 教育改革の段階

I. リトウンカリキュラム（現在の必由館）

→II. トートカリキュラム

→III. アクワイアドカリキュラム（完成形）

エ 職員謝辞

ウェルビーイングについて自問自答していて答えはまだ出ていません。私自身、音楽や芸術にふれ感動し、救われたこともありました。大事にしていきたいと改めて思いました。また、本来、学校は純粹経験の宝庫であると思っています。本校でも文化祭や部活動、休み時間の生徒同士の会話、時には喧嘩もあります。しかし、これらの経験を大事にして、生徒も自分自身も高校生活を楽しみながら送り、成長につなげたいと思います。

(8) 熊本県立大学 総合管理学部 教授 飯村 伊智郎 氏 学生2名

ア 日時：令和5年10月16日（月）15：00～17：00

イ 演題：『大学での学び

～ICTによる社会課題の解決と学生のブランドとしての社会実装』

対象：教職員

ウ 講演概要

○20131209 アメリカコンピューターサイエンス Education Week

オバマ大統領のメッセージ

○Tim cook—大西市長、Joswiak—県立大学へ来校

○県立大学の学部等構成紹介

総合管理学 社会科学系の学部

情報科学

「人とコンピューターとが豊かに共存し、安全で安心できる快適な社会の実現に貢献」

○飯村研究室

・ 2年次から「多様な協働によるか学生ブランドとしての社会実装」

（グループ研究）

・ 基礎研究→応用研究→実践研究

・ 研究領域

Swift：3ヶ月でスマホで動くアプリを作るスキル

1st ステップ Swift Playgrounds アプリケーション（文法）

2nd ステップ Mac の Xcode でサンプルアプリケーションの開発（写経）

3rd ステップ 自作アプリ 先輩メンターの存在

研究テーマは簡単には見つからない

依頼元から提示されるケース

学生を労働力としてしか見ていない企画は NG 見極めが難しい

学生の調査・ヒアリングによって共同研究に持ち込むケース

テーマに関して意見は言わない

共同研究が始まったら見守る・成果に対する価値づけ

世の中が求めているソリューションを社会実装する

例)

熊本市社会福祉協議会 「ボランティア受付手続きを改善せよ！」

日本語教育研究者 「方言聞き取り独習の機会を創出せよ！」

熊本市教育センター 「子どもたちの防災意識を向上せよ！」

特別支援学校教諭 「重症児との関わりの質を改善せよ！」

市教育センター 「子どもの読譜力をあげよ！（ふるジック）」

熊本地震震災遺構周遊アプリ「IKOU」

・ World Wide Developers Challenge

Swift Student Challenge コーディングの実力を披露するコンテスト

375名 Award Recipients Nanako Akioka Yuto Yamada

Virtual StudentM&G 世界で11名

同行学生2人の取組紹介 Ezu Q 重複障害視線入力装置

○データサイエンスとは データから気づきを引き出す研究分野

・身近に活用されている例

スマホアプリの推薦機能 交通アプリのルート 診断支援システム

ソーシャルメディアのターゲティング広告 健康管理アプリ

スマートホーム技術 株価の予測やリスク評価、信用スコアの算出

自然災害の予測と対策 犯罪予防とセキュリティ

○みんながみなエンジニアになり、プログラムを開発する仕事に就くわけではないのに、なぜ文理関係なく、データサイエンスを学ばなければならないのか

・文系にも求められる、データを「つなげる視点」

自らはデータ分析そのものを行わなくても、施策を立案するときデータを使ってエビデンスを示したり、他の部署や外部のパートナーなどとデータを共通言語として会話したりできる人材が、どの業種・企業にも求められるようになる。

・デジタル人材 230万人足りていない

○リテラシーレベルが達成できるカリキュラムを

・県立大では文系理系の区別なくデータサイエンス教育を必修化

2022年から年間4単位

・文系もプログラムを パイソンではなく、R言語

○どんな人材を育成したいのか。

・最先端のテクノロジーを使いつつ、そこに芸術的な感性や画期的なデザインを取り入れて人間のために何かを生み出そうとする人材を育成したい。

(9) 京都市立開建高等学校 教頭 宮越 敬記 氏 教諭 松田 賢太郎 氏

ア 日時：令和6年1月19日(金) 14:00~17:00

イ 協議：『新学科開設に向けた取組と新学科開設後の実践』

対象：教職員

ウ 概要

- ① 開建高校の紹介
- ② コアスキルの紹介
- ③ 必由学の紹介
- ④ 必由学の課題を開建高校と共有、意見交換

(ア) 京都市立開建高等学校の取り組み「コアスキル」(①+②)

京都市立開建高等学校(以下、開建高校)では目指す学びの姿として「自分らしく生きていくために必要な自ら考え自ら学ぶ力をつける学び」を目標としている。その目標に向けて、授業における生徒の姿も従来の姿とは違うものとなっている。開建高校が目指す生徒の姿とは、教師が与え生徒が受け取るという。

従来型の教育システムにおける受け身の生徒の姿ではなく、「学んでいることが楽しい」、「考えていることが楽しい」といった、「自ら考え、自ら学ぶ」生徒である。その目標に向けて開建高校が取り組んでいるのが、教材と生徒が対話をする関係性である。そのために、生徒が育むべきなのは「思考」スキルであった。

教材は多種多様である。画像資料や文献、立体物、経験、概念などなど、上げだしたらきりが無い。生徒が教材と対話をするということは、そうした様々な教材を理解していくということ。そのためには「様々な場面で活用できる能力」が必要になってくる。開建高校ではそうした「汎用的に活用できる思考のスキル」を「コアスキル」と呼び、生徒にこのスキルを意識して使えるようになってもらえるために「コアスキルカード」というものを作った。

コアスキルは4つに分類される。その分類とは、「探索」、「解釈」、「分析」、「表現」である。その四つの分類の中でさらにそれぞれ4つのスキルが設定されている。計16のスキルがコアスキルである。このコアスキルを常に意識して使ってほしいと考えている開建高校は、このコアスキルをそれぞれカードにしていた。カードの表面には簡単な説明とイラストにより各スキルを解説しており、裏面にはスキルの具体的な活用場面が書かれている。また開建高校はカードの材質にもこだわっている。高級感のあるカードにすることで、生徒もカードを大切に扱い、様々な授業にて活用しているとのことだった(カードを紛失した生徒もいないとのことだった)。

開建高校ではコアスキルカードを意識して使ってもらうため、普段の授業でも「授業のめあて」や「資料読解」を探究的なものに設定しているようだ。そこからコアスキルカードの活用をうながすことで、コアスキルの活用を定着させるのが狙いのようなのだ。

(イ) 必由学の現状と課題、打開案(③+④)

必由学が直面している課題について開建高校の先生に報告をし、打開案をいただいた。

Q1. 評価をどのように行っているのか？

A1. 開建高校では総探は文言評価を採用している。ルーブリックは自由度が少ないので開建では採用していない。

Q2. どのような年間計画で行っているか？

A2. 小さな探究を何度もこなすことで思考のクセをつけさせようとしている。1年生では探究活動を積極的に行い、とにかく思考のスキルを鍛えるとのことだった。

Q3. 必由学ではスキルをカードタイプではなくボードタイプにして表として使おうと考えているがどう思うか？

A3. 表内のスキルの配置にはこだわったほうがいい。「内側に行くにつれて容易に習得できるスキルにし、外に向かうにつれ難化していく」とか、「ICTと連携できるのであればスマホのアプリとして活用してみてもどうか。スキルにタッチすれば色が変わりタッチするたびに濃くなっていくと生徒も楽しく活用するのではないか」などの案が上がった。

○こうした案の中で共通していたのは「生徒自身が作ってみたいくなる感、取り組んでみたいくなる感が欲しい」ということだった。「生徒の主体性を刺激するような教材だと、生徒は勝手に活用する」といった意見をいただいた。

## エ 職員感想

今回の交流会で思ったことは、「開建高校は、スキルを身に着けるのが目的ではなく、目的達成のためにスキルを身に着ける必要があるという認識を教員間で徹底している」ということである。手段が目的化してしまうということは様々な場面で多々見られることだが、なかなか改善するのも難しい。

「開建高校が何を目標としていて」

「そのためには何が必要で」

「生徒がどのようになったら開建高校にとっての成功となるのか」

という明確なビジョンを教員同士がしっかりと共有していると感じた。こうした認識がブレなければ、学校としてもまとまりができ、教員間の相談などもしやすいと考える。各授業でのコアスキルの活用や総探の年間計画における探究活動のアイデアなどは担当教員だけでは成立しない。総探や学校改革ではお互いに助け合っていくしかないのだ。

今回の交流を通して、これからの普通科改革のキーワードは「教員間の協力」だと考えた。教員間でのしっかりとした意見交換と歩み寄り、そして相補性のある関係性が改革を大きく動かしていく原動力だと考えた。こうした関係性の実現のためにも積極的なコミュニケーションを常日頃から心掛けることが改革の第一歩だと言える。

いよいよ4月から本格的に必由学が始まるのでそれまでにほかの教員と良好な関係を築けて行けたらと思う。

(10) 京都精華大学 メディア表現学部 教授 鹿野 利春 氏

ア 日時：令和6年2月7日（水） 13：30～15：30

イ 協議：『必由館高校におけるDX推進に向けた取組等』

『熊本市の情報教育の充実及び環境整備等』

対象：教職員

ウ 概要

○講師の校内視察および、DX推進視点での施設設備充実に向けたアドバイス等

視察箇所	アドバイス内容
職員室	職員用PCのメモリ増設（消耗品費）により、作業効率を向上させられる可能性がある。
Call室	「デジタルものづくりスペース」へリフォームの可能性。 3Dプリンタ、ハイスペックPCの設置、iPadの貸出等 XR機器や対応アプリケーション導入の導入も考えられる
PC室	生徒用PCのメモリ増設、Adobe等のデザイン関係ツールのライセンス購入等を検討。情報Ⅱ相当の「情報総合」におけるコンテンツ作成の際に現状のメモリ8Gでは足りない。
視聴覚室	吊型のサブモニターを複数設置することで、視覚資料の提示や、複数データを同時表示して処理するなどの作業効率が向上し、使い勝手がよくなる。
展示ホール	6階という立地がもったいない。VR化して作品をHP上で見ることができるようにするなど、デジタル展示とのハイブリットの可能性が考えられる。
服飾デザイン室	CADのプリンタについて、インク効率のよいものに替えることで、全学年利用できるようにする。服飾デザイン以外の生徒も活用できるよう、条件を整え周知する。

○来年度開講の学校設定教科「必由学基礎」「情報総合」の内容等について

- ・1年次に「必由学基礎」でデータサイエンス等の基礎的な内容を扱い、2年次に情報Ⅰ、3年次に「情報総合」で情報Ⅱ相当の内容を学習するのであれば、情報Ⅰや情報総合の中でコンテンツ作成を充実させることができるのではないかと。
- ・関心の高い生徒が「デジタルものづくりスペース」でコンテンツ作成に取り組めるような環境を整えることも重要である。

- ・情報Ⅱ相当の「情報総合」においてはテキストを検討する必要がある。世界的規模で IBM が提供するコンテンツである「IBM スキルビルド」の活用を検討してはどうか。

(11) 漫画家 藤村 陵 氏

ア 日時：令和6年2月10日（土） 8：30～17：00

イ 演題：『社会課題について芸術表現することの価値』

実技講習：『キャラクターを設定して、見開き2ページのマンガを描いてみよう』

対象：教職員

ウ 生徒の感想

- ・今回藤村先生の学生時代の話、仕事の話など聞いてとても面白かったです。やはり学生時代の頃から頑張ってくる下積みをした結果が今へとつながるのだなあと思いました。今を大切にスマホばかり見ないで画力を上げるために絵を書き続けたいなとも思いました。即興漫画のネームを書くというので最初はやったこともないことに手を出すのはなかなか勇気がいってうまくできるか心配でしたが、自分の書きたいストーリーを自分なりに書く事ができてよかったし、それと同時にまだまだ画力が足りていないなあということにも気づけました。また、友達の漫画と読み比べっ子するのも同じオチだとしても新たな視点からの物語が読めてとても面白かったし勉強になった。このようなことをこれからの自分の絵に影響させていきたい。
- ・先生のお話を聞いて進路に関して自分で行動してみないとだめだと改めて思いました。自分も進路について考える大切な時期なので今日のお話を今後活かしていこうと思いました。今回の講演を機にせっかく自分の表現の幅が広がったので家でも時間があったら描いてみようと思いました。
- ・先生が必由館を選んだ経緯や漫画家になるために高校生活3年間でどのようなことを具体的にしていたのかを知ることができてすごく勉強になりました。実技でもはじめは全然内容が浮かばなくて難しかったけど、一度方向性が決まると一気に筆が進んで楽しかったです。
- ・藤村先生と同じ学校で学んでいるという事実を感じ、自分自身が誇らしいです。講話の中で私が最も印象的だったお話は「自分が少し頑張らないといけなくなるような進路を選んだ方が良い」という言葉です。本当にその通りだと思います。なぜならば目標に向かって努力し、その中で経験する苦労を重ねないと人は成長しないからです。
- ・進路の参考になる様々なお話を聞いて、とても有意義な時間でした。私は何かを選択するとき、楽な方を選んで後悔することが結構あるので、藤村先生の言っていた事を肝に銘じ、自分に必要なのはどちらか、勇気が必要な方を選んで、何事も後悔しないような生き方をしていきたいです。

- ・ 高校生の間で将来したいことから逆算して今、すべきことをしていた藤村先生の体験談を聞いて、私は今まで何をしていたのだろうと思いました。逆算して時間を無駄にしないようにしたいと思いました。
- ・ 初めて原稿を書くという体験をしてとても貴重な体験でしたし、ペンも本格的で初めてだったのでできるかなと思いました但实际上に試してみてもうまくいかないときもあれば、きれいに描くことができることもあるので新鮮でとても楽しかったです。ネームを書くのは楽しかったのですが、なかなかきれいにまとめられなかったのが悔しいなと思いつつでもそれも面白みだなと思いました。藤村先生の高校生時代を共感しつつもしないところもありながら、やはり量だなと思いました。私も積み重ねをしながら受験に向かいたいなと思いました。
- ・ 実際描いてみて漫画家の大変さと難しさを感じました。コマ割りは今回上手くできたと思ったのですが、2 ページで話を初めて終わらせるオチを考えるのがとても難しく、毎週連載している漫画家さんなど引き出しが多くても毎回悩んでいるのか、なんて考えたりもしました。私は心理描写のコマが好きなのですが、2 ページだけだったので入れるのが難しく、入れられませんでしたが、プロの方々は上手く構成して入れることができるのだろうか、など様々なことを考えて描きました。

#### エ 職員の感想

13年ぶりに再開し、成長した姿を間近で見られたことは感激もひとしおでした。高校在学中から漫画を投稿していたことは知っていましたが、それが相当頻繁であったことは今回知りました。漫画に対する情熱や描き続ける根性、プロの画力の凄さや集中力などに、教え子ながら私が学ばされました。生徒にとっては将来の自分の姿を見据えて、それを実現させるための努力と実行力の大切さを学ぶことができ、また身近な先輩に、第一線で活躍している漫画家がいるということで、大変な刺激になったのではないかと思います。

今後も、藤村様を始め必由館高校出身であり美術界の第一線で活躍されている一流の方を迎えての講習を継続していけたらと考えます。

#### (12) ヒロ・デザイン専門学校 講師 原賀 友子 氏

ア 日時：令和6年2月20日（火）13：10～14：40

イ 演題：『色彩の基礎及び色彩と生活のかかわりについて』

対象：教職員

#### ウ 概要

色彩を取り入れることで豊かな生活を送ることができる。そのための色彩の基礎や取り入れ方、考え方を講義していただいた。

##### 1 色を理解する

- ・ 赤、青などの「色」はそれぞれ200色以上あり、同じ色相でも、全く異なった色に見える。



- ・物を選択するときには色は大きく影響する。同じものでも、選択するシチュエーション（ライフスタイル、ライフステージ、オケージョン、ファッション）によってどの色を取り入れるかが変化していく。

- ・色は「色相」と「トーン」で表すと、相手に的確に伝わる。

## 2 色を使う

- ・配色の基本・・・「ベースカラー」「アソートカラー」「アクセントカラー」

- ※ベースカラーとアソートカラーが対比する場合（補色の組み合わせなど）

- アクセントカラーは使用しなくても良い。

## 3 ワードローブ・パーソナルカラー

- ・「似合う色」は服やメイク、ヘアスタイルによっても変化していく。

## エ 生徒の感想

・配色の基本は、まずコンセプト・テーマを決めてその後にベースカラー、アソートカラー、アクセントカラーの順にすることを知ることができました。また、面が大きくなるとアクセントではなくなるということを初めて知りました。それから、ライフスタイル全般がファッションに含むということを聞いて、たしかにと納得しました。自分が持っているペンケースやその中に入れている文具、ハンカチなど人によって大きく異なってくるのでおもしろいと思いました。また、ワードローブ・パーソナルカラーは自分の個性と調和する色でコーディネートすることであり、まずは自分の個性と調和する色を見つけないといけないと思いました。ファッション発表会では、好きな色だけで決めるのではなく、自分に似合う色、自分の動きや体型に合うワンピースの形にしたいと思っています。色は、好きな色ということだけではなく、似合う色、憧れている色、気持ちの色、決められている色、適切な色など様々な感じ方をすることができることを知りました。「色」と一言で言っても実はとても奥深くおもしろいと感じました。また、色彩・混色・配色について知れば知るほど、表現やデザインの幅が広がりそうだなと思いました。色彩について深く知っているのと、知らないのとでは、色のコントロール力が大幅に違ってきて、よりいっそう自由に表現ができると感じました。今後の活動に活かしたいです。

・色彩についての講義は初めてだったし、興味がある話だったので、すごく面白かったです。単純そうで奥深く、色を工夫するだけでも自分を最大限に出せるし、自分を魅力的にすることができるんだなと思いました。赤や黒や白などの単純な色の中にも沢山の種類があることを知ったし、組み合わせ次第では、洋服の形を変えなくても、沢山の違った表現ができることがわかりました。服飾デザインコースは、他のクラスよりも、色との関わりが深く、発表会用のコーディネートを考える際にも、重要になってくるし、普段着であっても、じぶんの個性をいかに色や洋服を使って表現できるかためられるし、そこに対して対応していかないといけないのもっと色について自分でも学んでいきたいと思いました。パーソナルカラーがあり、初めて聞いた言葉もあり、将来色に関わりの深い仕事に付きたいと思っているので、沢山知識をつけていきたいです。自分の

ことだけではなく、他人の似合う色や、まだ色について詳しくない人に対して教えてあげたいと思いました。人生において色は深く関わりがあり素晴らしいものと今回の講義を通して学べたし、もっと色に対して関心を持っていきたい期待と思いました。これから学びを生かしたコーディネートをつくって行けたらいいなと思います。

・配色の基本には、ベースカラー、アソートカラー、アクセントカラーがあることは知っていたけど、それよりも先にコンセプト・テーマが大切ということを知りました。配色に迷ったらコンセプト・テーマに戻って考え直せばいいということを知り、とても納得できたし参考になりました。そして、注意点も教えていただいたので、ファッション画を書くときや、服装を決めるときなどに思い出して活かしたいなと思いました。身の回りのものすべてが自身をつくり、それらにはすべて色が関係しているということを知り、色の凄さが改めてわかりものの見え方が変わってくるなと感じました。それを表した図がとてもわかりやすく、より理解できました。講義を聞いて一番印象に残った内容は似合う雰囲気には歩き方が関わってくるということです。最初はあまりピンとこなかったけど、例を聞いて歩き方によってドレスの動きが変わってくるということがわかりとても納得し印象に残りました。ファッションショーなどで衣装を見るとき注目するポイントが一つ増えました。そして、自分が日頃着る服でも雰囲気に合わせて歩き方にも気を使おうと思いました。来年のファッションショーにも活かしたいです。お話を聞いて、色彩の勉強をしていたので知っている内容もたくさんあったけど、さらに深めることができたなと思いました。色彩の知識はファッションやヘア・メイクだけでなく色々なことに活かすことができるものだと改めて強く感じる事ができました。将来自分は何をしているかは分からないけど、どんなことでも色彩の知識を活かしたいです。

#### オ 職員の感想

色彩の基本的な知識は学習していたが、実際の活用までには至っていなかった。しかし、今回の講義にて、私はこの色が似合う、りんごは赤色などの固定観念を解くことができた。しかし、生活に活かすためには、多様なシチュエーションや色彩の対象物にあった実践が必要であり、カリキュラムの練り直しも必要である。

#### (13) 九州ルーテル学院大学 准教授 坂根 シルック 氏

ア 日時：令和6年2月21日（水）10：30～12：00

イ 演題：『「学校教育とWell being」 ～フィンランドの教育実践～』

対象：教職員

#### ウ 概要

- ・Well（よい）being（状態）、つまり「幸せ」と訳される。
- ・「これがWell being!」というものはなく、「色々な縛りから自分を開放し、自分らしく 生きる」、それがWell beingである。

- ・人としての自分、どういきたいか、どうなりたいか、自分の価値観を大切に生きる。
- ・教育においては、個々の違いをもっと認めていくことが大切。意見を否定しない。
- ・オールマイティーでなくても良い、得意な分野を生かしていけるように認めること。
- ・小さなことを認める→気づいたときにその都度声に出して褒める。
- ・「考えること」が Well beingにつながる。

## エ 職員の感想

- ・ Well being は「より良く生きる」と単純にイメージしていたが、壮大で難しいのでは、と感じていた。しかし、「自分の価値観で自分らしく生きる」という表現に、より身近で、取り組みやすく、私達が Well being を実現できそうだと実感が湧いた。また、実現するには考えていくことが必要であり、学校生活での探究活動の必要性と目標がかなり明確に見えてきたと感じている。
- ・ グローバルについても漠然としていたが、「身近なグローバルに気づく（気づかせる）と今の自分との関係性が見えてきて、自分には何ができるか考えることができる。」というお言葉で、取り組めそう、取り掛かることができそうと思えるようになった。
- ・ 学校での学習内容については、生徒自身の年齢に応じて実生活に即した内容を取り入れ、社会人となったときのことをしっかり踏まえた内容であることを詳しく知ることができ、取り入れたいことがたくさんありました。ゆとりを持たせつつ、実生活との関わり方を学ばせていることがとても印象に残りました。

## IV 評価分析

# 1 目標設定

## 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

### 目標設定シート

本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）					
		令和4年度	令和5年度 6月⇒11～12月⇒2～3月	令和6年度 目標値	
a	(成果目標) 少人数編成による学習の効果として、多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力が、身に付いたと肯定的に回答した生徒の割合を見る。 ※少人数学級は令和6年度入学生より実施				
	本事業対象生徒: □	最大値	(1年)82	(2年)84⇒90⇒89 (1年)89⇒93⇒88	(3年)92 (2年)91
		最小値	(1年)28	(2年)32⇒32⇒31 (1年)29⇒27⇒30	(3年)34 (2年)33
		平均	(1年)57	(2年)60⇒60⇒60 (1年)59⇒60⇒60	(3年)63 (2年)63
目標設定の考え方: 少人数編成による学びを展開し、効果検証として「他者に関する寛容性」、「自己に関する自己効力」、「認知に関する創造性」等の資質・能力の伸長を経年経過及び学年別等において調査する。					
b	(成果目標) 熊本市役所等、地域社会の資源を活用した課題解決型学習を実施することにより、社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力が、身に付いたと肯定的に回答した生徒の割合を見る。				
	本事業対象生徒: □	最大値	(1年)80	(2年)82⇒85⇒86 (1年)88⇒88⇒87	(3年)89 (2年)90
		最小値	(1年)25	(2年)30⇒31⇒25 (1年)21⇒27⇒31	(3年)28 (2年)34
		平均	(1年)56	(2年)56⇒58⇒58 (1年)56⇒58⇒58	(3年)61 (2年)61
目標設定の考え方: 地域・社会の課題について探究的に学ぶことを通して、「認知に関する課題設定」「自己に関する興味」「コミュニティに関する地球市民」等の資質・能力の伸長を経年経過及び学年別等において調査する。					
c	(成果目標) 各教科及び探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力が、身に付いたと肯定的に回答した生徒の割合を見る。				
	本事業対象生徒: □	最大値	(1年)89	(2年)87⇒88⇒90 (1年)89⇒90⇒89	(3年)93 (2年)92
		最小値	(1年)18	(2年)24⇒24⇒24 (1年)20⇒25⇒26	(3年)27 (2年)29
		平均	(1年)56	(2年)58⇒59⇒60 (1年)57⇒59⇒59	(3年)63 (2年)62
目標設定の考え方: 探究活動等においてデータを科学的に分析したことにより、「認知に関する論理的思考」「他者に関する表現力」等の資質・能力の伸長を経年経過及び学年別等において調査する。					
d	(成果目標) 教師・生徒が主体的に学ぶ授業を実施したことにより、自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力が、身に付いたと肯定的に回答した生徒の割合を見る。				
	本事業対象生徒: □	最大値	(1年)88	(2年)84⇒89⇒91 (1年)90⇒90⇒86	(3年)94 (2年)89
		最小値	(1年)26	(2年)29⇒30⇒31 (1年)26⇒30⇒32	(3年)34 (2年)35
		平均	(1年)58	(2年)60⇒60⇒61 (1年)59⇒60⇒60	(3年)64 (2年)63
目標設定の考え方: 主体的に学ぶ授業を実施したことにより、「自己に関する個人実行力」「自己に関する決断力」「自己に関する成長」等の資質・能力の伸長を経年経過及び学年別等において調査する。					

#### <調査の概要について>

##### 1. 生徒を対象とした調査について

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
全校生徒数(人)	1,047	1,049	1,055	1,057	1,020
本事業対象生徒数			360	715	1,020
本事業対象外生徒数			695	342	0

令和6年度も複数回調査を実施し、経過測定データの比較から生徒個人及び学校全体としてのコンピテンシーの変容を分析し、伸長につなげる。

## 2 Ai GROW（評価分析ツール）の実施概要

本委託事業における取組をととして、生徒及び教員の資質・能力の変容や、教育活動の教育効果を正確に測定し、可視化することで、客観的な評価分析を行うため、以下のツールを活用した。

名称	Ai GROW
提供事業者	Institution for a Global Society 株式会社（以下「IGS（株）」）
受検対象者	1年生 355人、2年生 346人、教員 69人
実施時期	1回目：令和5年6月 2回目：令和5年11月～12月 3回目：令和6年2月～3月
当該ツールの特徴	IAT（潜在バイアス測定）技術を活用した気質診断と360°コンピテンシー評価にAIの補正を加え、最大で25のコンピテンシーを定量的に測定することができ、本委託事業による成果を科学的な根拠に基づき検証することが可能となる。
計測内容	本委託事業の成果目標として設定している指標を検証するため、以下の内容について計測を行った。  ○気質（5項目） ・内向性⇔外向性 ・保守性⇔開放性 ・平穏性⇔繊細性 ・独立性⇔協調性 ・自由性⇔自律性  ○コンピテンシー（15項目） ・認知系：課題設定、解決意向、論理的思考、創造性 ・自己系：個人的実行力、自己効力、成長、興味、耐性、決断力 ・他者系：表現力、共感・傾聴力、寛容、影響力の行使 ・コミュニティ系：地球市民 ・その他：主体性、協働性、リーダーシップ、創造的思考力、協働的思考力

《令和5年度実施結果》

本委託事業をとおして身につけさせたい資質・能力（＝成果目標）を、「学校コンピテンシー」と定義し、以下のように計測・分析を行った。

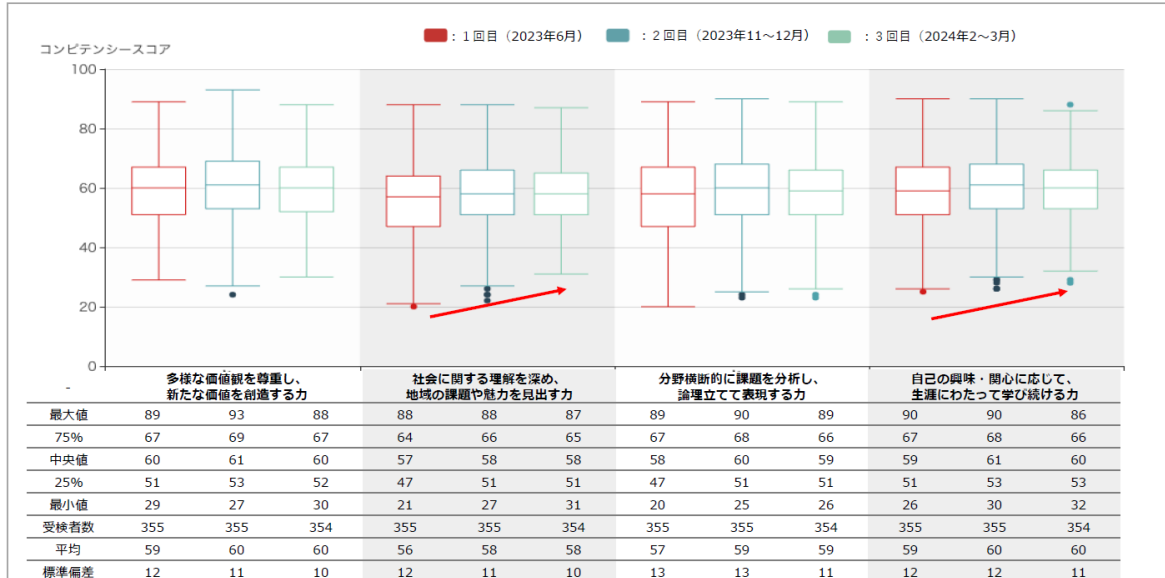
## 学校コンピテンシー

	分野	コンピテンシー
<b>①少人数によるクラス編制の実施による効果</b> →多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力		
(1)自分とは考えや意見の異なる相手に対しても理解を示し、それを許容する態度が持てる能力	他者	寛容
(2)何らかの課題に直面しても、「自分ならできると自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(3)他者に対して自分の考えや目的を伝えながら、ともに協働して物事を進めることのできる能力	他者	影響力の行使
<b>②「学校設定科目必由学」の新設</b> 熊本市役所(各課・室)、国内外NPO及び民間事業者等、地域社会の資源を活用した課題探究型学習の充実 →社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力		
(1)状況を的確に把握しながら「何をすべきか」「どうやって成し遂げるか」を自ら考え出せる能力	認知	課題設定
(2)興味のない分野のことであっても、情報を積極的に収集することのできる能力	自己	興味
(3)自分が住む地域や日本のことはもちろん、世界の一員として何ができるか考えられる能力	コミュニティ	地球市民
<b>③探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成</b> →分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力		
(1)道理や筋道に即して物事を深く考えることができ、複雑なことでも分かりやすく説明できる能力	認知	論理的思考
(2)自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力	他者	表現力
<b>④教育効果を外部に還元するシステムによるエージェンシー・スクール</b> →自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力		
(1)何らかの課題に直面しても、「自分ならできると自信を持って物事を進めることのできる能力	自己	自己効力
(2)自らの意思によって行動を起こして計画を進め、何事にも自ら進んで取り組むことのできる能力	自己	個人実行力
(3)自分の考えと客観的な事実とを照らし合わせながら判断し、物事を決めることのできる能力	自己	決断力
(4)どんな難題に対しても「自分の成長につながる」と信じて積極的に取り組むことのできる能力	自己	成長

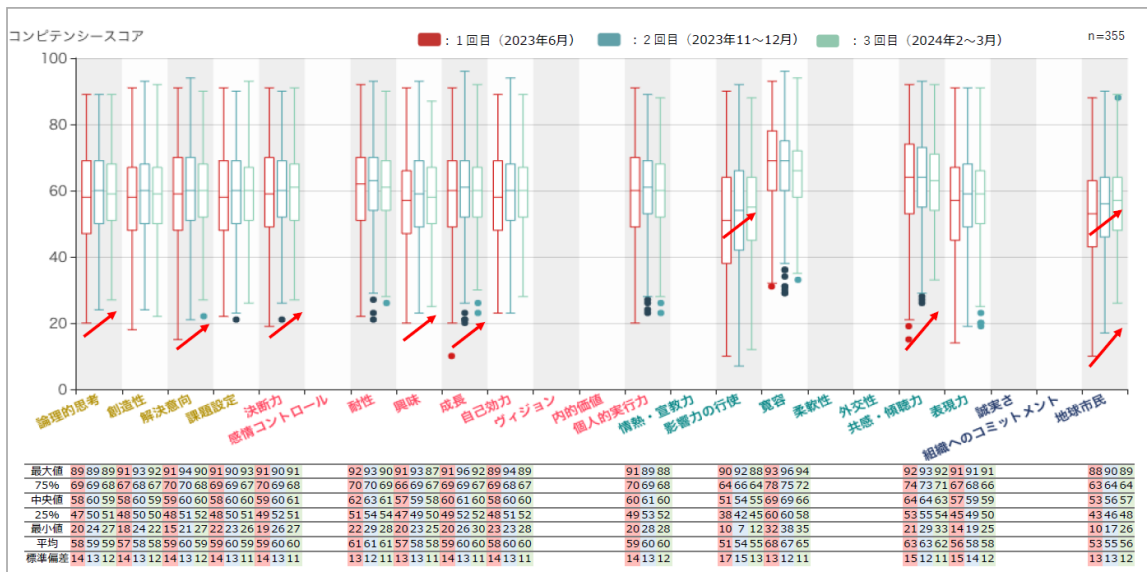
【IGS（株）作成報告書抜粋】

① 1年生の受検結果

学校コンピテンシー分布：1年生

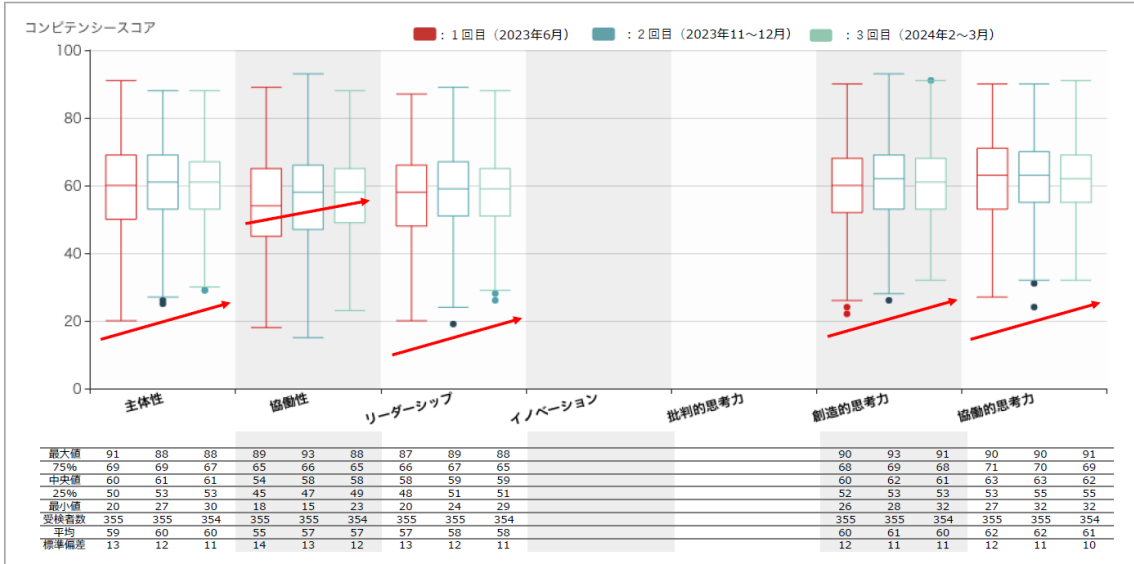


コンピテンシー分布：1年生



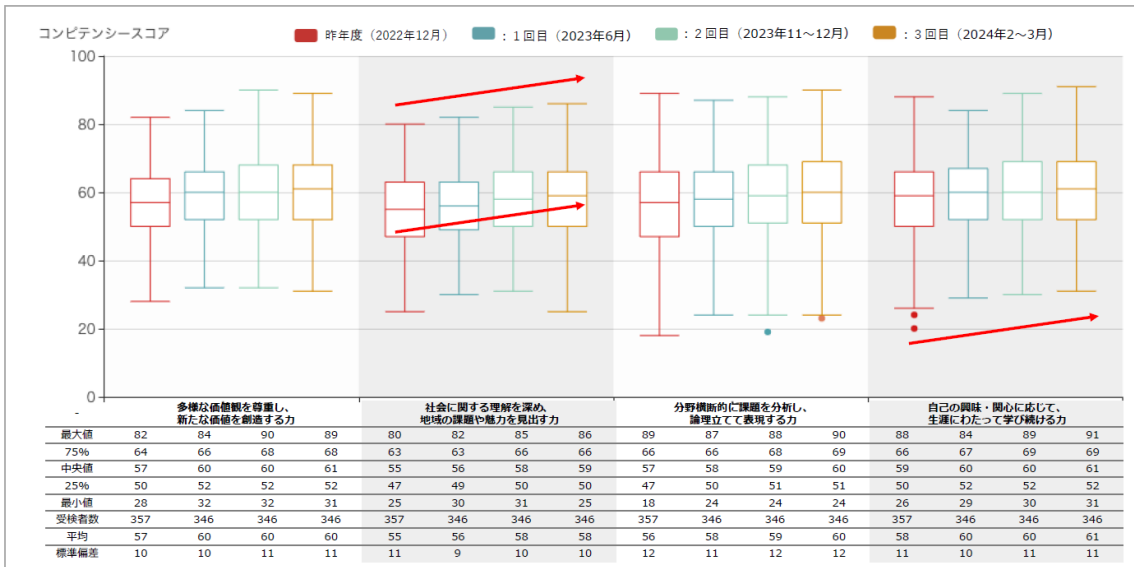


## その他のコンピテンシー分布： 1年生

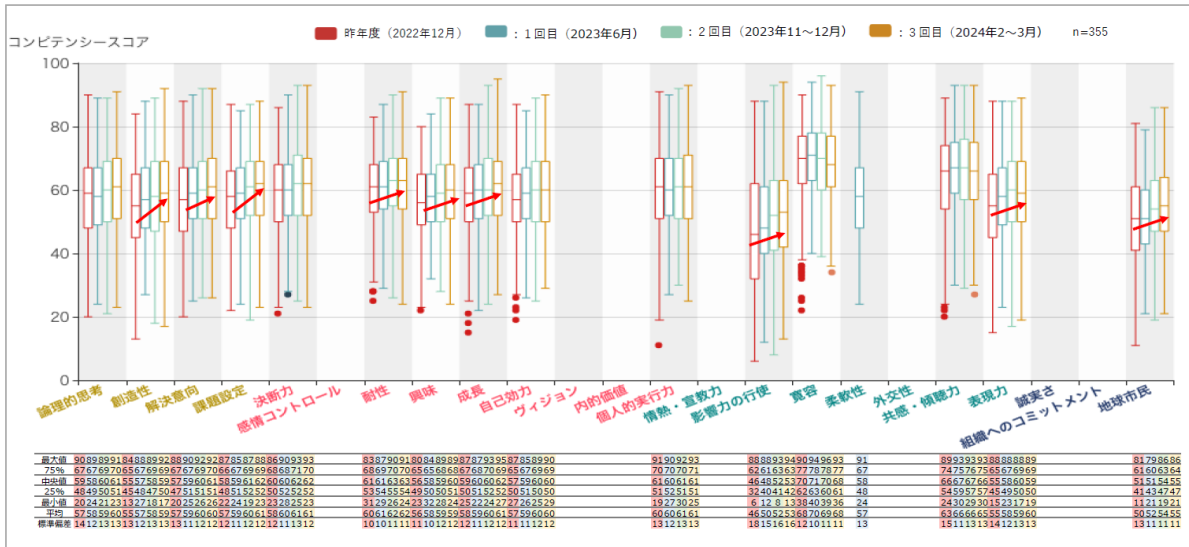


## ② 2年生の受検結果

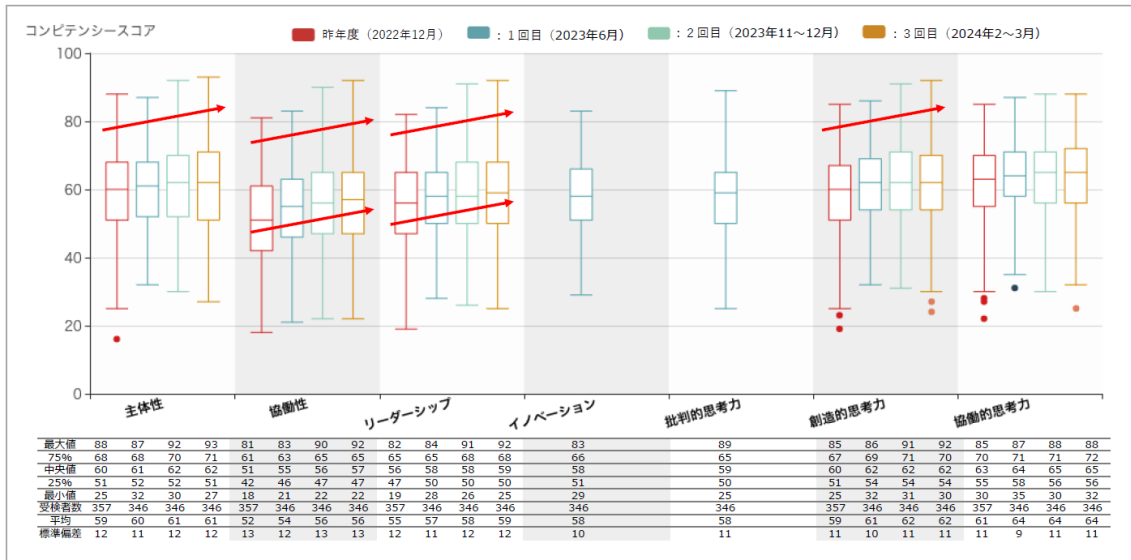
## 学校コンピテンシー分布： 2年生



## コンピテンシー分布：2年生



## その他のコンピテンシー分布：2年生



### ③ 評価分析を踏まえた次年度の取り組み

#### 受検結果サマリー（1年生）



- 学校コンピテンシーはどの項目も中央値に大きな変化はありませんが、「社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力」と「自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力」で下位層に伸びが見られます。
- コンピテンシーを見ると「寛容」「共感・傾聴力」の中央値が他と比べて高く、他者を受け入れたり共感を示すのが1年生の強みといえます。また、「共感・傾聴力」は1～3回を比較すると特に下位層が伸びたことが分かります。
- 「地球市民」は中央値・最小値ともに上昇しており、全体的に伸びが見られます。
- その他、「論理的思考」や「解決意向」、「決断力」や「興味」などで下位層の伸びが顕著です。ただ、2・3回目の受検では外れ値の生徒が増えているため、他の生徒よりもスコアが低いのが顕著な生徒も見られます。
- その他のコンピテンシーでも「協働性」は2回目ではばらつきが大きくなっているものの、1回目と3回目を比較すると伸びが見られます。「主体性」や「リーダーシップ」、「創造的思考力」や「協働的思考力」では下位層に伸びが見られます。

#### 受検結果サマリー（2年生）



- 学校コンピテンシーは「社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力」の最大値・中央値で昨年度から伸びが見られます。「自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力」も下位層で昨年度から伸びが見られます。その他、今年度のみの結果を見ると大きな変化はないが、昨年度と比較すると伸びている傾向もあります。
- コンピテンシーを見ると「寛容」「共感・傾聴力」の中央値が他と比べて高く、他者を受け入れたり共感を示すのが1年生と同じく2年生の強みといえます。
- 2年生は、「創造性」「解決意向」「課題設定」「耐性」「興味」「成長」「影響力の行使」「表現力」「地球市民」の中央値が上昇しており伸びが見られます。ただ、「影響力の行使」は他のコンピテンシーと比べると中央値が低く、ばらつきも大きいため課題といえそうです。
- その他のコンピテンシーを見ると「協働性」「リーダーシップ」の最大値・中央値が上昇しており伸びが見られます。「主体性」や「創造的思考力」でも最大値が上昇しています。

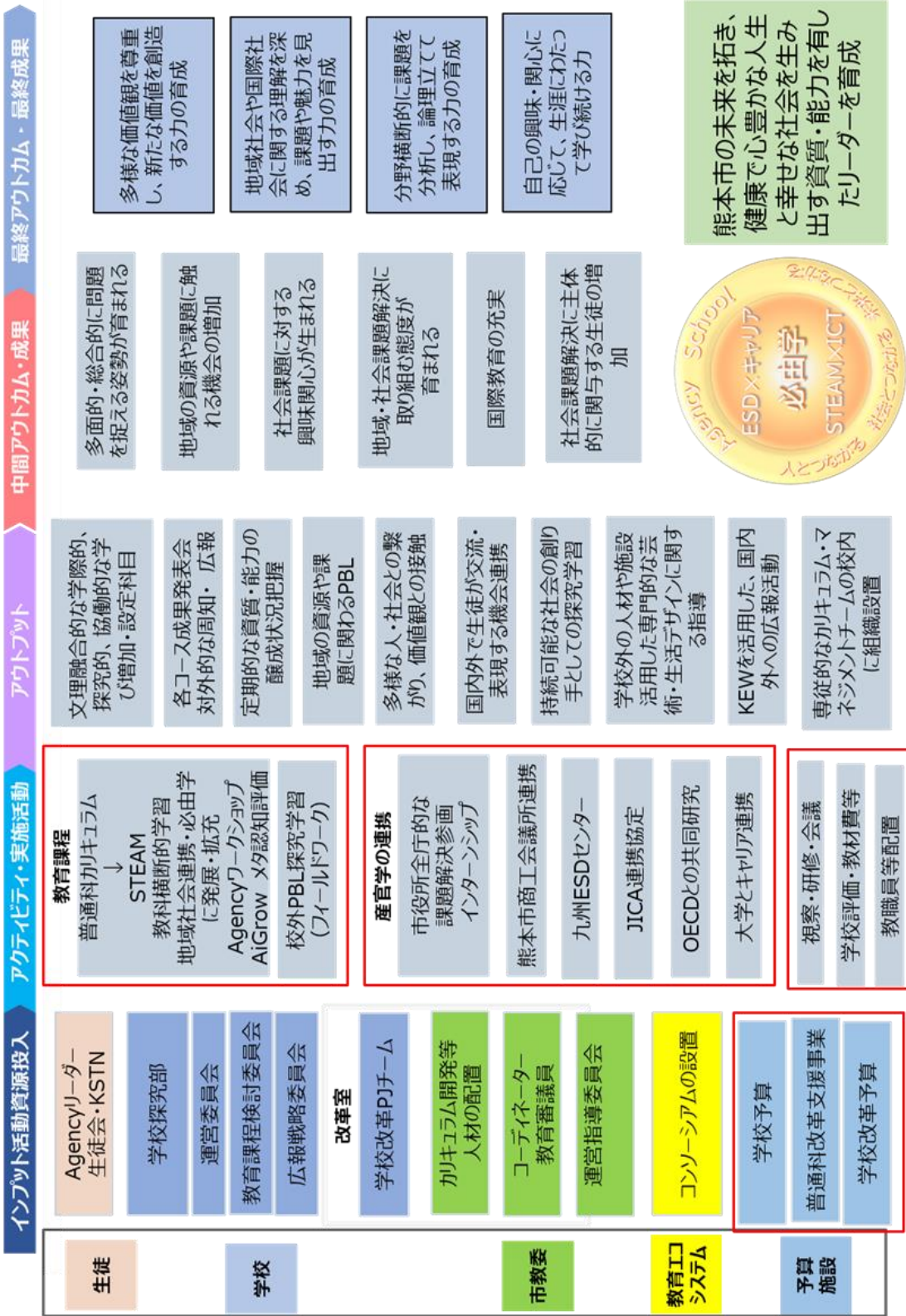
今年度の調査結果から、生徒のコンピテンシーについては、1年生は「個人的実行力」や「表現力」の分野をまた2年生は「影響力の行使」伸ばしていく必要性がわかった。そのために、次年度は、自分たちでプロジェクト学習を企画・実践・発表する機会を総合的な探究の時間を積極的に取り入れ、外部人材との協働や探究活動を通して、生徒たちが多様な考え方に触れ、知的好奇心を持つ機会を設ける。また、熊本市役所との連携を更に強化し、地域社会の一員としての自覚を促すなどの取組を行う。共通の目標達成に向けて共同して取り組む体験を増やしていく。

V 事業一覧

項目	内容	対象	日程
講演・講義	東北福祉大学 教授 長田 徹 氏 『人はなぜ学ぶのか。なぜ働くのか。～自走しよう必由館！～』	生徒	5/1
講演・講義	東北福祉大学 教授 長田 徹 氏 『キャリア教育の一層の充実に向けて』	教職員	5/1
講演・講義	熊本大学大学院教育学部 特任教授 前田 康裕 氏 『生徒が主体的に学ぶ学校づくり』 『生徒が主体的に学ぶ学校づくり ～対話的な学びを目指して～』 『授業改善 ～リフレクシオンタイムの活用～』 『「生徒が主体的に学ぶ授業づくり」と「概念化」 ～主体的・対話的な学びを目指して～』	教職員	5/23 7/11 11/7 2/15
講演・講義	Y'sReading 代表取締役 熊本大学医学部 教授 中山 善晴 氏 『「自己表現としてのプレゼンテーション20×20」 ～ペチャクチャナイトを使ってプレゼンテーション能力を身に付けよう～』	生徒	6/9
運営指導委員会	第1回運営指導委員会	運営指導委員	6/30
講演・講義	福岡教育大学 副学長 教育学部教授 石丸 哲史 氏 『必由館高校改革に向けたESDの役割』	教職員	7/6
「必由学」「探究的な学習」	『Student Agency PechaKuchaNight くまもと2023』	生徒	8/19
「必由学」「探究的な学習」	『Student Agency 阿蘇実地研修』	生徒	8/19 8/20
生徒主体	生徒主体学校運営プロジェクト 他県先進地を視察訪問、生徒会との意見交換 北九市立高等学校 広島市立美鈴が丘高等学校 京都市立開建高等学校	生徒	8/29 8/30
講演・講義	東京大学 教授 鈴木 寛 氏 『大学が変わる 社会が変わる 今、君たちにできること』	生徒	9/19
講演・講義	東京大学 教授 鈴木 寛 氏 『新生必由館高等学校に期待する教育の未来』	教職員	9/19
生徒主体	生徒主体学校運営プロジェクト 熊本魅力推進生徒会による政策提言	生徒	9/21

講演・講義	熊本県立大学 総合管理学部 教授 飯村 伊智郎 氏 『大学での学び～ICTによる社会課題の解決と学生 のブランドとしての社会実装』	教職員	10/16
「必由学」「探 究的な学習」	(株)美里まちづくり公社 マネージャー 濱田 孝正 氏 『フットパスその理論と実践 ～歩くことで地域を学ぶ～』	生徒	10/25 ～11/8
「必由学」「探 究的な学習」	『第4回SB Student Ambassador ブロック大会 (九州大会)への参加』	生徒	11/12
コンソーシアム	第1回コンソーシアム	コンソー シアム構 成員	11/27
「必由学」「探 究的な学習」	名古屋音楽大学 特任准教授 松波 匠太郎 氏 『音楽を通して高校生のキャリア形成、地域社会 へ積極的に関わろうとする態度の醸成を目指す』	生徒	12/13 12/27
講演・講義	京都市立開建高等学校 教頭 宮越敬記 氏 教諭 松田賢太郎 氏 『新学科開設に向けた取組と新学科開設後の実 践』	教職員	1/19
生徒主体	生徒主体学校運営プロジェクト 熊本市役所にて生徒議会の開催	生徒	1/20
「必由学」「探 究的な学習」	東京大学 教授 鈴木 寛 氏 トークセッション 『若者の「探究力」をいかに育むか』	生徒	1/23
講演・講義	京都精華大学 メディア表現学部 教授 鹿野 利春 氏 『必由館高校における ICT 活用に向けた取組等』	教職員	2/7
講演・講義	漫画家 藤村 陵 氏 『社会課題について芸術表現することの価値』 『キャラクターを設定して、見開き2ページのマ ンガを描いてみよう』	生徒	2/10
講演・講義	ヒロ・デザイン専門学校 講師 原賀 友子 氏 『色彩の基礎及び色彩と生活のかかわりについ て』	教職員	2/20
「必由学」「探 究的な学習」	『第8回サステナブル・ブランド国際会議 2024 東京・丸の内』	生徒	2/21
講演・講義	九州ルーテル学院大学 准教授 坂根 シルック 氏 『「学校教育とWell being」 ～フィンランドの教育実践～』	教職員	2/21
運営指導委員会	第2回運営指導委員会	運営指導 委員	3/11
コンソーシアム	第2回コンソーシアム会議	コンソー シアム構 成員	3/11

熊本市立必由館高等学校 新学科カリキュラムマネジメントロジック案 R5～R6年度





【熊本市立必由館高等学校】地域社会学科（令和6年度設置予定）

**教育理念：自ら考え、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら、自らの人生とよりよい社会を創造する力を育てる学校を目指す**

**革新的な教育活動の実践**

《育成する資質・能力》

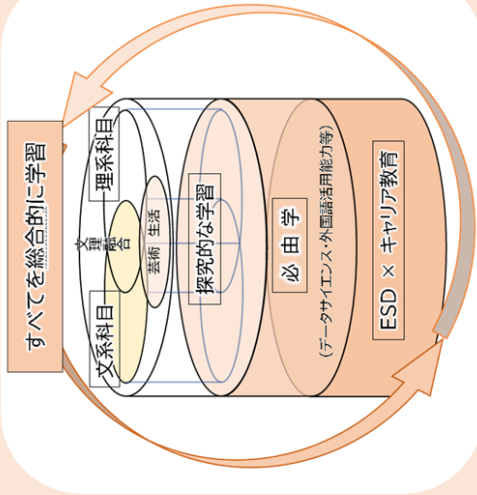
- I 多様な価値観を尊重し、新たな価値を創造する力
- II 社会に関する理解を深め、地域の課題や魅力を見出す力
- III 分野横断的に課題を分析し、論理立てて表現する力
- IV 自己の興味・関心に応じて、生涯にわたって学び続ける力

《特色・魅力ある先進的な教育の取組》

- ① **少人数によるクラス編制、生徒が主体的・協働的に学ぶ仕組み**  
多様な生徒へのきめ細かな指導、支援を実現 1クラス30人または35人の少人数によるクラスを編制(令和6年度入学生から)。  
生徒が主体的・協働的に学ぶことのできる授業づくり
- ② **I学校設定科目 必由学」の新設**  
持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育み、「Well-being」としての社会情動的な能力などを醸成
- ③ **熊本市役所等、地域社会の資源を活用した課題解決型学習の充実**  
市役所の全面的な協働体制のもと、市立ならではの教科等横断的・探究的学習
- ④ **探究活動等で収集したデータを科学的に分析・検証し活用する力の育成**  
ICTを活用することにより、課題解決に向けてデータを科学的に分析・検証し、表現する力を育成
- ⑤ **生徒・教師が主体的に学校づくりに参画する Agency School**  
生徒が授業づくりや校則の策定・見直しなど、生徒が学校創生に参画教育実践及び教育的効果的効果を積極的に国内外に還元するとともに、自らの学びは自らが創る Agency School



『文理総合探究科』での学び（イメージ図）



**令和5年度の目標**

- 学校設定教科設置・探究的学習の充実に向けた教育課程の研究開発
- 職員研修・生徒研修の充実
- 新学科の設置に向けた広報活動の充実
- 成果の普及
- 外部機関との連携体制の構築

**令和5年度の取組・課題**

- 学校改革プロジェクトチーム（コア会議（週1～2回） 学校改革プロジェクト委員会（月1～2回））
  - ・年間70回程度実施。・教育委員会のスクール・ミッションの策定を受け、スクール・ポリシーの検討から策定・教育課程の素案作成・広報活動のための資料作成・職員生徒研修の企画運営 などにおいて中心的な役割を担った。教育課程を具現化に向けて引き続き検討を進めていく。校内組織改編の検討を引き続き行う。
- 「出会うつながる」とともに創る ～必由館でやりたいをカタチに～」をキャッチフレーズとし広報活動のキーワードとして活用
  - ・熊本市WEB版広報誌・WEB版学校紹介リーフレット作成・YouTubeチャンネル・必由館X（旧Twitter）
  - ・熊日進字ナビ掲載（地元進字誌）おはよう熊本市（ラジオ）・こんばんは熊本市（TV）
  - ・学校説明会の開催（夏休中）・芸術コース体験入学・中学校訪問（令和5年8月～10月）
- 熊本市教育委員会主催の教育イベント・外部団体企画において全国へ発信
  - ・探究学習成果発表会へ中学1・2年生の生徒会を招待
  - ・芸術コース音楽系：校外のホールを貸し切り成果発表会を実施
  - ・美術系・書道系：公立美術館のホールを貸し切り卒業制作展を開催
  - ・生活デザインコース（現：服飾デザインコース）：イベント会場を貸し切りファッションショーを開催
- 市役所全庁の全面的な協力のもと、地域・社会が抱える課題に対して様々な観点から仮説を立て、専門家や地域の力を借りながら自分の考えを深め、課題解決への糸口を見出す課題探究型の学習を行った。高校生が社会の一員として地域（熊本市）のよさや課題等を自分事として捉え、自己のキャリア形成と関連付けながらよりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育むことができるよう今後取組内容のブラッシュアップを図る。

熊本市立  
**新生 必由館高等学校**  
 あたらしい普通科  
**文理総合探究科**

2024年度  
 学校紹介



**文理コース**

35名×7クラス 予定

**芸術コース**

美術系・音楽系・書道系

30名×1クラス 予定

**生活デザインコース**

衣をはじめとした生活を豊かにする学び

30名×1クラス 予定

**必由館**だから  
 なりたい自分  
 求められる私に

**新しい普通科で、正解のない時代に応える！**

「これまでの普通科普通」では出来なかった独自のカリキュラムと、少人数学級化で、あなたの夢実現をより細やかに応援します。

1年生で基礎科目をしっかり学ぶとともに、総合的な探究の時間＆学校設定科目「必由学1」を経験し、2年生で文理/理文のいずれかを選択できます。さらに3年生で、実践研究「必由学応用」を学ぶ文理/理文総合と、従来に近い時間割の文理/理文探究4つの類型に分かれます。

**必由館**だから  
 教科  
 総探 必由学

**熊本市役所全面支援**で、社会課題が自分ごとに！

観光・福祉・経済・都市計画・スポーツ振興・デジタル化などなど。市民の「困った」に日々向き合い、都市の未来を計画し、世界規模のイベントを運営している市職員や関係企業などからアドバイスをもらい、課題解決を進めていきます。

必由館では、たくさんの人や、新しい価値観と出会えます！

**必由館**だから  
 熱中できる  
 なかまと  
 出会える

**授業×自学×熱中×環境 = 成長！**

授業 - あたらしい普通科で、しっかり基礎学力を高められます。

自学 - オンライン教材「駿台サテネット21」を導入「もっと知りたい、学びたい」を支えます。

熱中 - いろいろなことに「ハマれる」学校風土。

環境 - 多様な価値観と才能を持った仲間との出会い。県内各所へアクセスの良い立地。充実の施設設備。

紹介動画集



**HYK 文理コースの類型** 自分を知り、地域を見つめ、社会にはばたく

1年

**共通**  
 総探 & 必由学

「総合的な探究の時間」と、学校独自の活動ができる「必由学」で、これまで以上に幅広い進路希望に応えます。

2年

**文理系**  
 理文に比べて  
 国語と英語が多い  
 総探 & 必由学

**理文系**  
 専門 専門 専門  
 物理 or 生物 + 化学 履修  
 総探 & 必由学

3年

**文理総合**  
 必由学  
 A スポーツクリエイション  
 B プレゼンテーション  
 C グローカル・イングリッシュ<sup>※2</sup>  
 D リベラル・アーツ<sup>※3</sup>

**理文総合**  
 必由学  
 A スポーツクリエイション  
 D リベラル・アーツ<sup>※3</sup>

※1 新しい普通科 - 必修科目は従来の普通科のまま。「必由学」や「コース専門」などの「学校設定科目」を設定し、従来の学力観だけでは通用しなくなった現代のニーズに応える教育も行うことができる普通科高校のこと。

※2 グローカル - global【地球規模の、世界的な】と local【地方特有の、身近な】を組み合わせたことば。グローバル人材とは、世界的な異文化を理解できる視点を持つことで、地域の特徴・強みに気づくことができ、活躍・貢献のできる人材のこと。

※3 リベラル・アーツ - 自ら設定したテーマ・課題に身に付けた資質能力を活かしながら探究活動を行い、現代を深く洞察する力を高めます。



# 在校生にききました。



## ココがイイところ! 必由館



上層階から熊本城が見えて眺めが良い

プールが屋上にある

新地電鉄が目の前を通り

今年はクラスマッチが3学年一緒にあってスポーツを通して絆を深めることができた



弁当

売店のパンとからあげ弁当が美味しい

クリームパンが美味しい!!!!!!

売店には、冷たい飲み物、ゼリー(冷えひえ)、クッキーあり。文房具もたくさん売ってあります!



ナナデココ人気

自販機多い。3つあれば2つは新500円玉で買える!!

階段が長く運動になる

先生が面白くて、フレンドリー

M村先生の生物の授業が分かりやすく、話を聞いていて生物の面白さが伝わってくる。



先生も参加してくれる!!

クセツヨの先生しかいない!

夏制服ポロシャツの着心地が良い

格久池畔井川川沿いで走れる

部活に力を入れている



保健室前の掲示板がおもしろい

探検団や必由堂などの文化財があり、必由館の歴史を学べ、知識が増える。



6階の美術棟では先生や先輩の作品がみれる!

4階は服飾のドレス!

5階では書道がみれます!

謎のホコリが毎日大量に出るので掃除のやりがいがある。



街に近い!!(これ大事!!)

近くにコンビニとかセライがあるので部活帰りアイス食べれる

部活で楽しみながらこれからの人生で必要なことを学べる

部活に集中できる!青春できる。

自由なことが多い

充実した学校生活が送れ、過ごしやすい、青春できる!!





1年 文理コース																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
全	現代の国語	英語文化	公民	数学I	数学A	物理基礎	生物基礎	体育	保健	芸術I	英語コミュニケーションI	英語・表現I	家庭基礎	必修学	総括	LHR																	
2年 文理コース *履修名は必修																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
文系	論理国語	古典研究	地理総合	歴史総合	数学II	数学B	数学C	化学基礎	英語基礎I	体育	保健	英語コミュニケーションII	英語・表現II	情報I	必修学	総括	LHR																
理系	論理国語	古典研究	地理総合	歴史総合	数学II	数学B	数学C	物理基礎	化学基礎	化学	体育	保健	英語コミュニケーションII	英語・表現II	情報I	必修学	総括	LHR															
3年 文理コース *履修名は必修																																	
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
文系総合	論理国語	古典研究	英語	地理探究/日本史探究/世界史探究	政治・経済	倫理	体育	英語コミュニケーションIII	英語・表現III	情報総合	キャリアA/キャリアD	キャリアB(プレゼンテーション)	キャリアC(グローバルイノベーション)	総括	LHR																		
文系探究	論理国語	古典研究	地理探究/日本史探究/世界史探究	政治・経済	倫理	数学総合	応用化学基礎	実践英会話基礎	体育	英語コミュニケーションIII	英語・表現III	情報総合	キャリアA/キャリアD	総括	LHR																		
理系総合	論理国語	古典研究	地理探究/日本史探究/世界史探究	政治・経済/倫理	数学総合	応用化学基礎	応用生物基礎/公民科特設	体育	英語コミュニケーションIII	英語・表現III	情報総合	キャリアA/キャリアD	総括	LHR																			
理系探究	論理国語	古典研究	地理探究/日本史探究/世界史探究	数学総合/数III	化学	物理/生物	体育	英語コミュニケーションIII	情報総合	総括	LHR																						

1年 数理コース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	現代の国語	英語文化	公民	数学I	数学A	科学と人間生活	体育	保健	芸術I	英語コミュニケーションI	英語・表現I	家庭基礎	芸術専門	必修学	総括	LHR																
2年 数理コース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	論理国語	古典研究	地理総合	歴史総合	数学II	化学基礎	体育	保健	芸術I	英語コミュニケーションII	英語・表現II	情報I	芸術専門	必修学	総括	LHR																
3年 数理コース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	論理国語	古典研究	地理探究/日本史探究/世界史探究	政治・経済	倫理	芸術II	英語コミュニケーションIII	情報総合	芸術専門	キャリアA/C	総括	LHR																				
<div style="text-align: right; margin-right: 100px;">           芸術専門I: 数学B/C/生物の中から1科目選択         </div>																																

1年 生活デザインコース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	現代の国語	英語文化	公民	数学I	数学A	科学と人間生活	体育	保健	芸術I	英語コミュニケーションI	英語・表現I	家庭基礎	芸術専門	必修学	総括	LHR																
2年 生活デザインコース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	論理国語	古典研究	地理総合	歴史総合	数学II	化学基礎	体育	保健	英語コミュニケーションII	英語・表現II	情報I	家庭専門	必修学	総括	LHR																	
3年 生活デザインコース																																
単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
全	論理国語	古典研究	地理探究/日本史探究/世界史探究	政治・経済	倫理	英語コミュニケーションIII	情報総合	家庭専門(必修)	キャリアA/C	総括	LHR																					
<div style="text-align: right; margin-right: 100px;">           芸術専門I: 数学B/C/生物の中から1科目選択         </div>																																

# 出会う つながる ともに創る ～ 必由館と 学びたいをカタチに～

すべてを総合的に学習する

